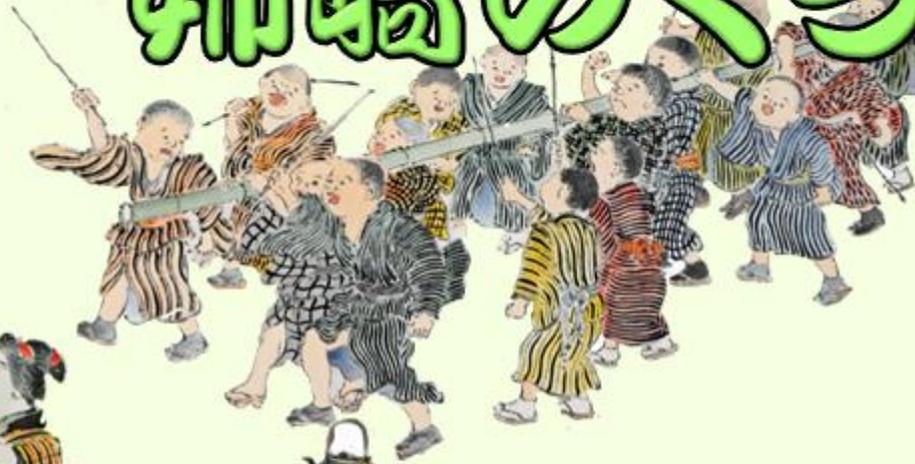




むかしの

姉崎のくらし



姉崎を知る会



## はじめに



### ◇「姉崎を知る会」とは

「生まれ故郷・姉崎を改めて学びたい」「終の棲家となる姉崎を知りたい」こんな思いの方が集り、初心者レベルの会で、「地元・姉崎の歴史・文化・くらしを、地元目線で学び、次世代へつなぐ！」をキャッチフレーズとして平成30年10月に創立し、6年目を迎える会です。

### ◇「故郷姉崎町年中行事」とは

「故郷姉崎町年中行事」は、明治30年代、姉崎仲町在住の齊藤孝氏が、画家・廣瀬蘆竹に姉崎の行事・くらし・風景を描かせたもので、当時の姉崎を絵で伝える貴重なものです。絵はA3サイズの和紙に柔らかい色使いで描かれ、58枚の絵が折本画帖2冊につづられています。躍動感あふれる当時の人たちの描写は、観るものを引き込まずにはおきません。また、細部まで丁寧に描かれており、当時のくらしを調査する資料としても一級品といえます。原本は齊藤家より市原市に寄贈され、市原歴史博物館に保管されています。

### ◇展示会が最初

この「故郷姉崎町年中行事」を多くの方に知ってもらうため、会員が絵一枚ごとに簡単な説明をつけた展示会を姉崎公民館を振り出しに、姉崎市民ギャラリー（姉ヶ崎駅）、市原歴史博物館で開催して、多くの方から好評をいただきました。

### ◇「故郷姉崎町年中行事」深掘りへ

次いで、姉崎地区を描いた51枚の絵を対象に、それぞれに描かれている項目一つひとつに着目し、それらを調べるにより明治期の姉崎のくらしを掘り起こす「深掘り」をすることにしました。もとより全員が民俗学などは門外漢であり、多くが移住者で昔の姉崎のくらしを知る由もなく、戸惑う会員が殆どでしたが、「会長権限」で会員全員に絵を割り当て、半ば強引に推し進めることにしました。地元長老へのヒアリングを中心に、インターネットや資料・文献調査によって描かれているくらしを掘り起こす作業が開始されました。しかし、作業開始直後に「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」が発せられ、長老へのヒアリングは中止せざるを得ませんでした。調査はインターネットや資料・文献での調査、あるいは寺や神社を訪ねての調査となってしまいました。地道な調査は1年間続きました。

そして、会員の苦労が積み重なった成果ができました。

### ◇「むかしの姉崎のくらし」発刊

どのような項目に着目し、どのように説明するかは担当者に任せたこと、また、調査の深淺により、「個性豊かな成果」となりましたが、会員の努力の結晶であり、姉崎を知る会の「金字塔」です。

初心者レベルの「金字塔」ではありますが、会の「現在の記録」として、また多くの皆様にむかしの姉崎を知っていただくため「むかしの姉崎のくらし」を発刊することにしました。

この冊子が「むかしの姉崎のくらし」を次世代につなぐことの一助となることを願っております。

令和6年3月吉日

姉崎を知る会 会長 石黒 修一

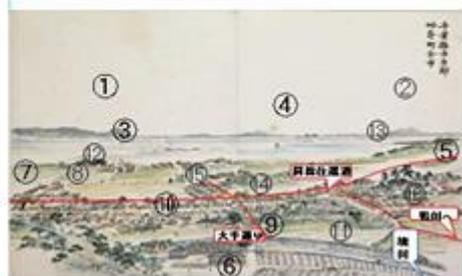
# 目次

この冊子は原本の絵を年中行事、風景、人物に分類し、姉崎地区外の絵7枚を付録とし、年中行事の絵は暦の順に掲載しております。  
注:49島穴神社は姉崎神社と関連が深いためⅡ風景に記載しています。

	頁				
ページの見かた	1	<b>七月</b>	<b>十一月</b>	<b>Ⅲ人物</b>	
<b>I 年中行事</b>		15.七夕馬	34.酒の市	50.義僕市兵衛	51
一月		16.七夕飾り	<b>十二月</b>	51.孝子五郎	52
01.神飾り	2	17.盆市	35.年蛤採り	<b>IV付録</b>	
02.筒粥	3	18.門題目	36.すす掃除	52.付録1	53
03.かたびて	4	19.団子貰い	37.歳末市	53.付録2	54
04.ほうほんや	5	20.施餓鬼	<b>Ⅱ風景</b>	おわりに	55
05.オビシャ	6	21.盆踊り	38.姉崎町全市		
06.玉切り	7	22.モモクッテ	39.姉崎浦の富士		
<b>二月</b>		23.姉崎神社祭禮	40.姉崎神社		
07.初午	8	24.蝗送り	41.大六天社		
08.辻祈禱	9	<b>八月</b>	42.妙経寺		
<b>四月</b>		25.モグラたたき	43.長遠寺		
09.釈迦祭	10	<b>九月</b>	44.川崎稲荷		
10.潮干狩り	11	26.風祭り	45.八坂神社		
<b>五月</b>		27.九月十三夜	46.瑞安寺		
11.端午の節句	12	28.祖師法難法会	47.靈光寺		
12.蕨採り	13	<b>十月</b>	48.天照大神		
13.蛞蝓採り	14	29.初茸狩り	49.嶋穴神社		
<b>六月</b>		30.長遠寺御開帳			
14.登山式	15	31.ヤブサメ			
		32.相撲			
		33.神無月参詣			

## 38 市原郡姉崎町全市

### 風景



- ① 富士山
- ② 筑波山
- ③ 三木屋 澤
- ④ 五大力船
- ⑤ 妙経寺
- ⑥ 陣屋跡(姉崎小学校)
- ⑦ 川崎稲荷
- ⑧ 長遠寺
- ⑨ 大手通り
- ⑩ 仲町
- ⑪ 境川(椎津川)
- ⑫ 本町
- ⑬ 大河岸
- ⑭ 浜町

## 38 市原郡姉崎町全市

### 風景



画題: 千葉県市原郡姉崎町全市

この絵は、姉崎小学校裏の正坊山付近から眺めた姉崎の全景です。

絵の中央部に旧房総往還が通り、東京湾に点在する五大力船が姉崎のかつての繁栄を象徴しているようです。蘆竹の絵には、西に富士山と北に筑波山が良く描かれていますが、この絵でも描かれています。

絵の手前に大きく、小学校は鶴牧藩陣屋の跡で、校門を出ると道は、大手通りに出て大手橋で椎津川(境川)を渡り海岸に向かっていっています。火の見やぐらが立つ旧房総往還との交差点の先が浜町で、更に先の大川岸(大河岸)には五大力船の帆柱がのぞいています。

交差点の右側・本町と左側・仲町がかつての賑わいの中心部でした。仲町の先の大木は川崎稲荷の御神木でしょう。明治44年に焼失しました。その手前に長遠寺の石碑と、少し入ったところに山門と本堂が見えます。本町と養老町と鴨川への交差する道は屈折し、付近に時を知らせる鐘楼らしき建物が見られます。

絵の右端に目を移すと、白砂青松の浜辺(八反歩)が今津に向ってのびており、右には二子塚古墳が見えます。下には、妙経寺の広い敷地の中に石碑、参道、本堂、講堂等、当時のお寺の繁栄のようすが伺えます。その周りには門前町の養老町です。

旧房総往還には長遠寺の石碑の側、仲町通りに3本ほどの電信柱と電線が描かれています。明治2年8月の横浜での電信網創設以来、北海道から九州まで、そして朝鮮半島まで通信網は設置されました。房総半島では、東京と千葉間が明治11年、千葉と木更津間が明治17年、木更津と館山間が明治22年、佐倉と銚子間が明治18年に電信網は設置されました。

明治45年、養老町北の新宿に姉崎駅が開業すると、町の中心部は駅前へと移って行きました。

## 39

画題: 千葉県市原郡姉崎町全市

この絵は、姉崎小学校裏の正坊山付近から眺めた姉崎の全景です。

絵の中央部に旧房総往還が通り、東京湾に点在する五大力船が姉崎のかつての繁栄を象徴しているようです。蘆竹の絵には、西に富士山と北に筑波山が良く描かれていますが、この絵でも描かれています。

絵の手前に大きく、小学校は鶴牧藩陣屋の跡で、校門を出ると道は、大手通りに出て大手橋で椎津川(境川)を渡り海岸に向かっていっています。火の見やぐらが立つ旧房総往還との交差点の先が浜町で、更に先の大川岸(大河岸)には五大力船の帆柱がのぞいています。

交差点の右側・本町と左側・仲町がかつての賑わいの中心部でした。仲町の先の大木は川崎稲荷の御神木でしょう。明治44年に焼失しました。その手前に長遠寺の石碑と、少し入ったところに山門と本堂が見えます。本町と養老町と鴨川への交差する道は屈折し、付近に時を知らせる鐘楼らしき建物が見られます。

絵の右端に目を移すと、白砂青松の浜辺(八反歩)が今津に向ってのびており、右には二子塚古墳が見えます。下には、妙経寺の広い敷地の中に石碑、参道、本堂、講堂等、当時のお寺の繁栄のようすが伺えます。その周りには門前町の養老町です。

旧房総往還には長遠寺の石碑の側、仲町通りに3本ほどの電信柱と電線が描かれています。明治2年8月の横浜での電信網創設以来、北海道から九州まで、そして朝鮮半島まで通信網は設置されました。房総半島では、東京と千葉間が明治11年、千葉と木更津間が明治17年、木更津と館山間が明治22年、佐倉と銚子間が明治18年に電信網は設置されました。

明治45年、養老町北の新宿に姉崎駅が開業すると、町の中心部は駅前へと移って行きました。

- ① ページタイトル
- ② 絵
- ③ 項目番号
- ④ 項目名
- ⑤ ページ番号
- ⑥ 画題
- ⑦ 説明文

## 1.各ページの構成

左側: ①ページタイトル、②絵、③項目番号、④項目名  
 右側: ⑤ページ番号、⑥画題、⑦説明文

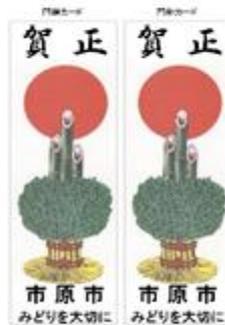
- ①ページタイトル
  - ・ローマ数字: 連番
  - ・文字列: タイトル
- ②絵
  - 原本の絵: 原本は変形A3版
- ③項目番号
  - 描かれた項目につけた番号
- ④項目名
  - 項目の名称
- ⑤ページ番号
  - 通しのページ番号
- ⑥画題
  - 絵の中に書かれている絵の題名
- ⑦説明文
  - 絵に関する説明

## 2. 絵の掲載順

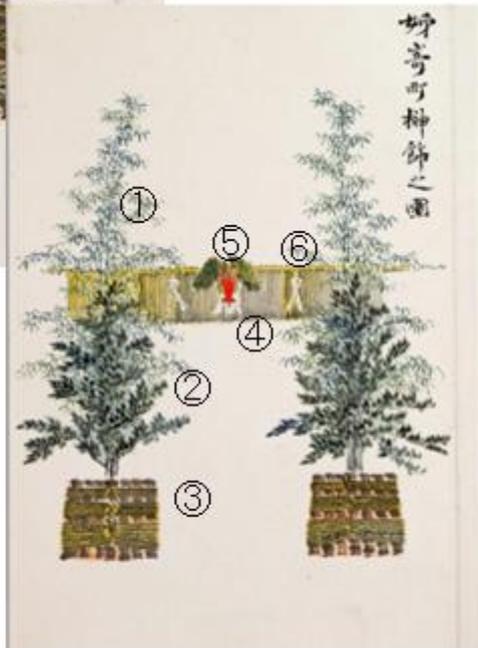
- ①行事・くらしに関するもの(暦順)
- ②風景
- ③人物
- ④付録: 姉崎地区外の絵

## 3. その他

- ①画題に「寫意」とある絵について  
 蘆竹が情景をイメージして描いたもので写実でないとの意味



- ① 竹
- ② 榊
- ③ 土台:七五三に縛る
- ④ 大しめ縄
- ⑤ お飾り
- ⑥ 紙垂(しで):伊勢流



## 姉崎町榊飾り之圖

姉崎神社には「松を嫌う」謂れがあります。ご祭神の志那斗弁命(しなとべのみこと:女神)は旅に出た夫神の帰りを待ちわび「待(まつ)は憂いもの、いやじゃ」と嘆いたところ、これを聞いた村人は「女神さまは”松”がお嫌いなのだ」と聞き違え、以来境内には1本の松もなくなり、村では松の絵柄の着物や襖絵を用いることは行わなくなり、果ては他所から嫁いできた嫁の名「まつ」を「よし」と改名したと信じられないようなことが実際にあったそうです。

正月には門松は立てず、松を榊に替えた榊飾り(門榊りともいう)を飾りました。姉崎神社では今でも榊飾りを立てています。市原市では門榊りカードを発行しています。(左図)

絵では竹に榊を添え土台を下から縄を七回、五回、三回に廻して縛っています。今は土台はありませんが、やはり七五三で縛ります。七五三は縁起の良い数で「しめなわ」は注連縄・七五三縄・×縄などと書きます。

大しめ縄には「ウラジロ」「橙」「イセエビ」のお飾り、人形の伊勢流紙垂が下げられています。



現在の榊飾りと茅ノ輪  
「幣束」「ウラジロ」「橙」が飾られています



- ① 神官
- ② 狛犬(置物)
- ③ 立会人
- ④ 洋帽

### 一月十五日 御筒粥之神事

姉崎神社ではかつて筒粥神事が行われていたようですが、今は行われていません。

「市原郡誌」に記載された「筒粥神事」を紹介します。

『姉崎神社に於いて行はる古式の中に、御筒粥の神事と称するものあり。毎年二月十五日新年祭の日に之を行ふ。今其の大要を記さん其の前日にあたり、清流に生ずる葦を伐採り、長さ三寸許、其の数二十七本を清水に洗滌すること数十回、筒を作り三本宛合して一組となし。第一を桑の分、第二を蚕の分と、順序を定めて之を麻絲に編み、皮の儘なる柳の木を軸木として巻き付け、又洗米一升を石臼にて挽きて細粉となし、之を煮て白粥をつくり新しき手桶に入れ置き神前に於いて神官祝詞を奏し、無念夢想にて上の葦筒をその中に挿入し、其のまま神前に供え翌十五日払暁、該器を徹し、社殿に於いて小刀を以て葦筒を縦断し、筒中につまりたる粥の分量を見て、其の歩合を定め、九種農作物(桑・蚕・麻・麦・早稲・晩稲・粟・大豆)の其の年に於ける豊凶如何を卜するを以て例とせり。尚前記の歩合書を謄写して氏子中に配布す。農家は之を見て、其の年に於ける農作の参考に供すといふ。』

この絵は、姉崎神社の本殿で行われた筒粥神事の様子と思われる。筒粥神事は無くなりましたが、立っている宮司の足元の狛犬の置物は、現在も本殿内に置かれています。紋付き袴姿の立会人は、洋帽を後ろに置いているようです。

姉崎神社では行われなくなった御筒粥の神事は、袖ヶ浦市の飯富神社や、匝瑳市の松山神社などで現在も続いております。市原市の飯香岡八幡宮では、1月14日に、一般には公開しない秘儀として行っています。



- ① お盆の上の品物
- ② 子どもたちの髪型
- ③ 着物
- ④ かけ声
- ⑤ 履物
- ⑥ 子どもたちの役割
- ⑦ 籠の中の物

## かたふた 古事

正月4日に姉崎の各地区で行われていた子どもたちの行事です。「バタクサ」と呼ぶ地域もあるようです。

絵の下部、年上と思われる子どもが持っているお盆には子どもたちが作った物が載っています。めがね(年神様に捧げ物をする容器)の輪と底を剥がした物に紙を巻き、「大判」、「小判」と書きました。

また、底の部分の部分を大小四角小切りにして「小銭や米」にしました。白や杵なども作られました。「大福帳」の文字も見られます。



子どもたちが作った物

めがね

絵では下段が12名、上段が10名の総勢22名で二組に分かれて練り出しました。子どもたちは口々に「カタビテ(バタクサ)ガメッタ、カタビテ(バタクサ)ガメッタ」と囃しながら各家々を廻り、作った物を配って歩きました。各家々では「ご苦労さんでした」と言って受け取った物を神棚に挙げ、子どもたちにおひねり、供え餅、お菓子などを盆の上に載せてくれる。これを貰った子どもたちはいただいた物を籠に入れ、「デジンダ デジンダ カネグラ タテロ ドンドコ タテロ」と囃して次の家に向かいました。家々を廻り終えると子どもたちは、もらった餅を焼いて食べたり、おひねりのお金を全員で分けたりしました。

参加した子どもたちの着物は、木綿の裕か単衣のようです。色はそれぞれですが、縦縞が流行っていたようです。また、「肩上げ」と言って肩の辺りを上げて縫い、成長したら下して着られるようにしてあります。帯は三尺や紐のようです。

下段、最後尾の子どもは足袋だけで何も履いていません。ほとんどの子どもたちが下駄か草履を履いています。



- ①子どもたちの着物
- ②履物
- ③子どもの数
- ④参加した子ども
- ⑤杵の棒
- ⑥空に月
- ⑦右上に書かれた文字

## 正月十四日 鳥追ほうほんや

田畑の害鳥を追い、豊年を願う小正月の行事です。正月14日の夜、子どもたちは「ホーホンヤ ホーホンヤ」と囃しながら担いだ青竹(孟宗竹)を正月の門飾りに使った杵の棒で叩きながら家々を回りました。「ホーホンヤ」とは「豊年だ」という意味で、青竹を叩くのは雀を追う意味だということです。子どもたちの着物は木綿の袴か単衣ではなかったかと思われます。色はそれぞれですが、縦縞が流行っていたようです。また、肩上げと言って肩の辺りを上げて縫い、成長したら下すようにした着物を着た子どもがほとんどです。帯は三尺か紐のようです。また、草履履きの子どもが多く、下駄履きの子どもは一人です。

実際に青竹を担いだり、そばについたりしている子どもは17人で、そばで声を出している子どもが二人。全体で参加者は19人です。この行事は男子だけが参加し、年齢が上の子どもが前の方に見え、年少の子どもが後ろについています。竹から離れている二人の子どもの内の一人は両手に息を吹きかけて手を温めているように見えます。小さな子どもを負った子守りの女の子や子どもたちのそばで幼子をあやす老女が描かれていることから、それほど遅い時刻ではないと思われます。

地区ごとに歌詞は少しずつ違っていましたがおよそ次のとおりです。

ホーホンヤ ホーホンヤ アワ(粟)キノ ホーホ  
 ホーホト ホヘンドガ タタンガ タンガラス(田鳥)  
 ナワシロノフチニ コモチドリガネテテ ナゼソコヘネテタ  
 タタネバ15ニチノ オケ(お粥)クッテ スットベ スットベ  
 ホーホ コトシトシハ ミノク(弥勒)トシデ  
 サンガンゼニラ タスキニカケテ ヨネハカリ ヨネハカリ

子どもたちは囃しながら町を廻り、初午の宿となった家では一段と声を張り上げて歌いました。そうすると、その宿に集まっていた親たちからお金を振舞われたということです。



- ① 東照宮の祠
- ② 大山祇の祠
- ③ 弓を放っている人
- ④ 立会人2人
- ⑤ 弓
- ⑥ 的
- ⑦ 子供2人

## 画題なし

オビシャの元来の意味は歩射(ブシャ)です。弓射には騎射と歩射があり、前者が流鏑馬であるのに対して後者はブシャ・ビシャ・オビシャとも読まれ、両足を地面に着けて弓を射ることです。そしてこの2つの弓射は庶民の間に武芸としてではなく神事として伝えられ、占いの意味を持ってきました。

市原市内のオビシャでは、本来の意味の矢を射る形を残しているものは少ないですが、次のような例があります。

十二社神社(片又木)の2月15日の歩射祭は、7歳の子供が桜の木と麻紐で作った弓で竹の矢を射ます。的に当たればその年の豊穡が約束されるといいます。

熊野神社(小田部)の1月20日のオビシャの弓矢と的は当番が作ります。的には3本足の黒い鳥を描くが、これは熊野神社のお使いといい、また3本足の鳥は災いをもたらす鳥であるので、これを射るのだといっています。

妙見神社(葉木)の1月22日のオビシャの弓と矢も当番が作り、矢は氏子が各自持参します。五穀豊穡を祈る行事なので的には穀物の名を書きます。第1矢は神官が、あとは氏子が射ます。矢の的中数により豊凶を占い、作物を占ったようです。

熊野神社(金剛地)のオビシャは2月11日で、的は成人に達したばかりの男子が作って奉納しました。第1矢は辰巳(東南)の方角に魔除けの捨矢として射る慣例があり、その後の矢は真中に当たると大いに喜びました。この時に使った弓矢は若者たちに記念として与えました。

現状では、宴会のほうに重点が置かれ、弓の行事がなくなっているオビシャが圧倒的に多いのです。

姉崎神社のオビシャについての記録は、この廣瀬蘆竹の絵の他に何も残っておりません。

(市原市教育委員会発行「市原のまつり」より)



- ① 玉(たま)  
② 玉切棒  
(たまぎりぼう)

### 姉崎町 玉切之遊戯

子供たちが「玉切り」の遊びをしている。

『市原の年中行事他』(昭和40年)によれば、大正期の初めころまでは、正月の雑煮祝のあとに、男の子供は「玉切り」の遊びをした。

青年組もあり、村の道路上を場所にして、甲陣と乙陣の2組に分かれて両陣の中央に線を引いて対抗線を作った。両陣では最初に腕利きの者が先頭について、互いに玉切棒(打棒)を持って敵玉の切返し戦である。二番三番の打者は、一番の打者の後ろに続いて陣をとり玉切棒を構える。

玉は平玉で、直径6~9cm位で樺や椎などの固い生木の輪切り玉で、子供組は小さく、青年組は大玉が使われた。玉切棒は「へ」の字形に生枝で造り、各自が持つ。

対抗距離は子供組で6~8間(約11~15m)、青年組は10~15間(約18~27m)位あった。一つの陣は3人位が適当で、4人5人と多くなれば後方にはめったに玉は廻ってこなかった。先頭者が疲れたら後の者と交替し、先頭者が切り負したら二番三番が切返し合った。

野球のホームランに似た飛玉がでると打陣が喝采し勝ち誇り、受玉の割れた時も同様の興奮にひたった。切返し玉に当たり怪我もする、スリルの伴う遊びであった。自転車の農村普及と共に、道路での遊びが危険となり自然と興味もうすれた。

### 「玉切り」遊びのルール

- 1、甲の一番が、玉を乙の地面に向けて強く投げ走転。
- 2、乙は、待ち構えた玉切棒で玉を甲へ切返し。
- 3、甲は、また玉を乙に切返し反復切返しのゲーム。
- 4、一番が受け負したら、二番が切返し先頭と位置交替。
- 5、二番が受け負したら、三番が切返し先頭と位置交替。
- 6、全員が切り負した場合は、その組は負け。
- 7、切返しても玉が自陣内に留まった場合も負けとなる。



- ① 稲荷大明神の掛軸
- ② 酒を勧める女性
- ③ きつね踊りの男
- ④ 角樽で寝る男
- ⑤ 薦被り酒を注ぐ人
- ⑥ 齋藤善兵衛 酒一斗
- ⑦ 廣瀬晋兵衛 酒一斗
- ⑧ 廣瀬喜兵衛 酒一斗
- ⑨ 幟旗

正一稲荷大明神 文政五年壬午 初午

二月の最初の午の日に行われた初午の行事。多くの地域で行われ、地域で祀る稲荷様に五穀豊穡・商売繁盛・家内安全を祈願し、当番の家(宿:やど)で直会(なおらい)を行なう行事で、絵は宿での直会の場です。

稲荷大明神の掛軸の前には商売繁盛を祈願の五玉そろばん、折り詰め、酒、魚などが供えられています。座敷の中央の大皿の鯛(脇に取分け皿、箸)、その周りでは、女性に酒を無理強いられている酔った男、それを茶化する男、ちびちび飲む男、三味線で歌う男、狐踊りの男、踊りをはやす男、飯を食う男、大杯を飲む男、角樽を枕に酔いつぶれる男、話込む二人、火鉢からたばこの火をとる男等々直会(はどんちゃん騒ぎ)。給仕の女性たちも大忙し。薦被り(銘柄:女盛)の呑み口から片口鉢に酒を注ぐ人、料理やお銚子を運ぶ人。当時は数少ない町内の寄合で盛り上がり絆を深めていたのでしょう。

蘆竹も浮かれたのでしょうか? 上部には差し入れの書き出しが貼られています。宿(当番)からは赤飯、齋藤善兵衛、廣瀬晋兵衛、廣瀬喜兵衛からは酒一斗と書かれています。齋藤善兵衛は蘆竹のパトロン、廣瀬晋兵衛は蘆竹の本名、廣瀬喜兵衛はおそらく蘆竹の身内。しっかり宣伝しています。

手前の幟旗には「正一稲荷大明神」と書かれています。「正一位稲荷大明神」の「位」が紙面の都合で省略されています。「正一位」とは神階(しんかい:かみのくらい)で最も高い位です。なぜか全国の稲荷神社は全て「正一位」です。稲荷神社の総本社は伏見稲荷大社で、神階は「正一位」です。神社の分祀時には勧請元の神階は引き継がれないのが普通ですが、建久5年(1194年)後鳥羽天皇が「伏見稲荷大社勧請の神体に『正一位』の神階を許した」とされており、伏見稲荷を分祀した稲荷神社は全て「正一位」なのです。



## 二月二十九日 辻祈禱

五三の桐の幔幕の前に縁台が組まれ、その上で僧侶が読経、おりんを打つ。経机には経本、巻物がおかれ蠟燭が灯る。導師には傘がかけられ、その横で道具を運ぶ挟み箱を担ぐ男が煙草を吸っている。老若男女子供たちが読経を見物している。

画題は辻祈禱となっているが、この場景がどのようなものであるかは不明。一般的に読経はご本尊や墓・塔婆に向かいされるものと思うが、道行く人や見物人に対して行っている。人々は僧侶を拜むというより楽しんでいるようです。画題の二月二十九日は、新暦では閏年の4年に一度だが、旧暦の一か月は30日または29日であり、二月二十九日は特別な日ではない。なんの日なのであろうか。

全国各地に町の入り口や、辻(道の交差点)に注連縄や梵天をたてて町に魔物が入るのを防ぐ、あるいは神輿の巡行の地域を清める祈禱は行われているが、辻で僧侶が読経することは見つからなかった。九州地区には辻には「辻神」という魔物がいて禍をもたらすとこの言伝えがあるという。また、辻は現世とあの世をつなぐところともされており、その辻で地域の悪霊退散、無病息災の祈禱をしたのだろうか。



- ① 読経する僧侶
- ② おりんを打つ僧侶
- ③ 経机
- ④ 五三の桐の幔幕
- ⑤ 挟み箱
- ⑥ 笠



- ① 鬼子母神本堂
- ② 石造物
- ③ 参道
- ④ お店
- ⑤ 天神山古墳方面
- ⑥ 姉崎神社方面

### 姉崎町臺鬼子母神 四月八日 釈迦祭

姉崎台・天神山古墳脇にあった鬼子母神(現宝蔵寺)での、お釈迦様の誕生を祝う四月八日の釈迦祭(花祭り)の様子を描いている。

鬼子母神はその昔、他人の子供をとって食い殺していたが、釈迦に諭され帰依して安産・子育ての守り神になったとされています。多くの参詣者で賑わっていますが、女性が多いのはこのためでしょう。

鬼が神に変わったため「鬼」の一画目の点(角:つ)をとって「**鬼**」として「鬼子母神」と寺の梵鐘に刻まれています。

絵の左が天神山古墳です。当時はこの一帯は雑木に囲まれた高台であったことがわかります。鬼子母神への道は広く整備され参詣者相手のお店もあり、鬼子母神は地元の崇敬をあつめていたことがわかります。

鬼子母神は現在「宝蔵寺」となり、昭和50年代に下図点線のように道筋が変わり、正面が反転し、絵の階段はなくなってしまいました。下写真は昭和40年代・鬼子母神を参詣を終え階段を下る「ねんねこ姿」のお母さんたち。





- ① マンガ
- ② 富士山
- ③ 五大力船

### 姉崎浦 汐干狩

姉崎浦の浜辺での汐干狩りの様子。遠方に富士山が見え、頂上付近には雪が残っているので、季節は4月頃か。五大力船の姿も見える。

漁法は現在と同じ、手掘りのマンガ(馬楸のナマリ)による。浜辺での汐干狩り漁は女性の仕事で、成人男性の姿は描かれていない。採取された貝は、貝殻を取り去り、中の肉だけにするムキミ(剥き身)にする。ムキミの作業も女性の仕事であった。

採取した貝を竹製のザルに入れ、ザルの紐を天秤棒に巻き付けて女性が運んでいる。絵が作成されたのは、明治後期である。作業をしている女性の服装は、着物姿で髪の毛を覆う手拭い姿である。

右の写真は、昭和32年(1957)頃の貝採りに出掛ける女性の写真である。着物の形や素足でなかったりと多少の違いはあるが、絵の中に描かれている女性達と共通点は多い。



(写真:『市原の失われた漁撈』より)

東京湾岸の市原の海浜漁撈区が、八幡五所から埋立が始まったのは、昭和32年(1957年)からであった。それ以降、次々と市原の全漁撈区が昭和36年(1961年)までには全て埋立られた。

注:五大力船:江戸(とうきょう)との海運に使われた船  
河川も航行できる喫水の浅い回船。



- ① 上総袖凧
- ② 上総角凧
- ③ 鯉のぼり
- ④ 鐘道の幟旗
- ⑤ 軒菖蒲
- ⑥ 凧の糸をいれた籠
- ⑦ 折れ釘(土蔵の突起)
- ⑧ 富士山

## 五月五日 節句

5月5日の「端午の節句」は菖蒲の花が咲く時期に行うところから「菖蒲の節句」という別名がある。柏餅を食べる風習は、日本独自のもので、柏は新芽が出るまで古い葉が落ちないことから「家系が絶えない」縁起物として広まっていた。

昭和30年代の姉崎の端午の節句は、山から切り出した丸太で自宅の庭に鯉のぼり用の柱を立て、親せきなどからもらった「鯉」を紐で吊る。当時は紙で作ったものが主流であった。家の中には、嫁の実家や親せきからもらった鍾道様等の人形を飾る。子供の晴れ着は嫁の実家からもらい、当日のお祝いの膳には男衆が隣組も含めて20人から30人参加した。

絵は現在の仲町・郵便局あたりでの節句の風景。袖凧が上がり角凧をあげようとしている。男の子の初節句に子供の名前を書いた大凧をあげる風習があった。

凧にはウナリをつけ、糸目の長さが10mもある大凧が、五月の空にビューンと唸りながら浮ぶ姿に大人も夢中になった。節句には大きな鯉のぼり、鐘道の幟旗もたてた。

家の軒先には「軒菖蒲(のぎしょうぶ)」という菖蒲やヨモギを飾りものを下げた。菖蒲やヨモギは香りが強く邪気を払うという。

土蔵の漆喰の壁の突起は「折れ釘」と言い屋根や壁薄修理の時にはしごをかける足場となり、万一の火災の時はここに綱を掛け引き倒し延焼を防ぐとも言われている。



初節句の大凧  
(昭和40年頃)



- ① わらび
- ② 背負いカゴの女性
- ③ 松の林

### 天羽田原野蕨採之寫意

わらびは日当たりが良く開けた場所に生え、人手の入らない原野に群生します。画題にも原野とあります。しかし、絵のように開けた地形は天羽田には見当たりません。蘆竹はわらび採りに適した場所を用意したのでしょう。絵には松の林が描かれていますが、現在の天羽田には松はありません。

4～6月頃が蕨の季節であり、絵のようなお母さん方が子供をつれての、わらび採りの風景が見られたのでしょう。

背負いカゴの女性は手ぬぐいを姉さん被り、オレンジ色の長着を大きく端折り、藍染の半纏・前掛け、股引き、草履姿です。前掛けの下のオレンジは端折った長着の裾でしょう。多くが同じような股引き姿です。

背負いカゴ一杯に採ったわらびは保存食として年間を通しての食べ物だったのでした。

わらびは日がたつと固くなるので、採ったその日のうちにあく抜きします。あく抜きは灰を混ぜてた熱湯に一晩漬け、水洗いして水に漬けておくそうです。現在は灰ではなく重曹を使うようです。あく抜きしたわらびは「おしたし」、煮物で食べ、塩漬け、乾燥して保存食として利用されました。完全に乾燥させた乾燥わらびは1年以上持つそうです。

春の山菜といえばわらびにゼンマイが思い浮かびますが、わらびが日当たりが良い開けた場所に生えるのに対し、ゼンマイは湿り気の多い日陰・沢すじなどに生えるそうです。

天羽田は沢がないのでゼンマイは少なかったのではないのでしょうか。



わらび



- ① マキカゴ
- ② ヤス
- ③ 出張船
- ④ 浦役人

### 旧五月 姉崎浦蛸採り并浦役人出張船之写意

海に入りマキカゴの柄を持ち、腰アテをして後退しながら海底をかい、浅蛸を採る「腰マキ」と呼ばれる漁法が中心。「腰マキ」による漁法は、家族単位や夫婦単位で行われ、役割分担が決められているようだ。マキカゴで作業するのは男性で、女性は採った貝をザルで受(ナ)小舟まで運んでいる。小舟には子供の姿も確認でき、横にはお櫃らしき形の物もある。小舟では休憩や食事をしたのであろう。水深は漁師の膝から腰あたりで、埋立前の姉崎浦は遠浅の海岸であった。

右奥は、旧五月に実施された出張してきた浦役人による、浅蛸採取漁の視察と監督のためと考えられる出張船が描かれている。公務中を明示する旗が掲げられている。浦役人は頭部が丸い山高帽に黒色の袴姿で、飲食の接待を受けている。左奥では、ヤスで採った(目突き魚)平目のような魚を出張船に差し出している。

『市原の失われた漁撈』（市原を知る会 平成18年）には、姉崎の浅蛸漁について、次のように書かれている。椎津川の河口は、姉崎の浦に向けて流れ込んでいたため、河口には沢山の浅蛸の稚貝が発生した。しかし稚貝の少ない年もあって、八幡の村田川・五井養老川の河口で4～5回種を買ったこともあった。漁協の組合員男女総出で4～5月頃に稚貝を蒔いた。浅蛸業は腰巻で7～8月頃迄行い、1日に30～40杯も採った。浅蛸は浦安・大森方面の仲買に買い取られていった。

ヤス:長い柄の先に先端が数本に分かれた鋭い鉄金具を取り付けたもの。



- ① 浅間神社石碑
- ② 行人
- ③ 小御嶽神社
- ④ 接待の婦人
- ⑤ 煎餅？を持つ子供

## 六月一日 姉崎神社境内 浅間神社登山式

姉崎神社本殿北側にある浅間神社での登山式の様子を描いています。

浅間神社は木花開耶姫(コノハナサクヤヒメ)をご主神、富士山をご神体とし、富士山を崇敬する「富士講」の拠りどころとなっています。「富士講」は富士登山を修行の場としており、近場に富士山を模した「富士塚」をつくり模擬登山を行います。姉崎神社の浅間神社も「富士塚」であり、御社3号古墳の頂に浅間神社を祀ったものです。

富士講では旧暦の6月1日(現在は7月1日)に登山式(山開き)を行っていました。白い行衣姿に菅笠を被り、手に鈴、金剛杖を持ち「六根清浄・お山は天気」と唱え富士山に登ったといわれていますが、姉崎地区の富士講はなくなってしまいました。

「小御嶽神社」は富士山五合目にある旧噴火口に祀られた神社です。絵は「小御嶽神社」に「御」を小さく書き足したように見えます。蘆竹は「御」を書き漏らし後で追記したのではないのでしょうか。

右手でお茶の接待をしており、子供が大きな丸い煎餅？を持ち、後ろには果物のようなものがみえます。どのような接待がされてでしょうか？今は知る人はいません。



現在の浅間神社



- ① 真菰の馬(空荷)
- ② 真菰の馬(草を積む)
- ③ 下着をつけない子

## 七月七日 拂曉ハイ馬之遊戯

七月七日七夕の朝行われた子供の遊び。真菰で作った馬を台車に乗せ草刈り場へ行き、草を馬に積んで家へ帰る。家では馬に赤飯を供え祝ったという。

絵では左下へ向かう子供たちが曳く馬は空荷で、反対方向は草を積んでいる。左下方向に草刈り場があり、反対方向に家々があるのであろう。

真菰や藁で作った馬は一般に「七夕馬(たなばたうま)」と呼ばれ、千葉県各地で作られている。地域によって馬の形状・大きさが異なる。昔の七夕行事は旧暦で行っていたためお盆に近い時期となる。お盆にご先祖様が乗る馬と牛をキュウリとナスで作ることと重なり、馬だけでなく牛と合わせて作る地域が多いという。



畑木地区で作られたミニチュアの真菰の馬と牛

絵の子供たちは下着をつけていない。何歳ころから下着をつけたのだろうか。この時代はまだふんどしが主流であっただろう。ふんどしの歴史はふるく、古墳時代の埴輪がふんどしらしいものを身につけている。しかし布は高価であったため一般人がつけることはなく、戦国時代には戦死者の身分をふんどしの有無で判断、江戸時代はふんどしのレンタルがあり祭りや吉原へ行くときに利用したなどの話がある。

明治22年に22才の成人を対象として徴兵令がだされ、徴兵検査時に白い越中ふんどしが支給され、入隊した時にもそれが支給されたという。多くの一般男性は20才までは特別なとき以外はふんどしを着つけなかったのではないだろうか。



- ① 短冊を書く子たち
- ② 短冊を飾る子たち
- ③ スイカの飾り
- ④ 泣く子
- ⑤ 屋上の七夕飾り

## 手習子佛暁之写意

七夕の笹飾りを作っている子供たち。短冊に願い事を書く子、その短冊を笹竹に結ぶ子、スイカの飾りを結ぶ子、上手にできず泣いている子、今でもみられる光景です。

しかし、墨を使うのにこんな振袖姿は汚れないかと心配です。当時の子はそんなに筆遣いが達者だったのでしょうか。画題に「写意」とあります。おそらく、着飾った子供たちで絵をにぎやかにするためあって、実際は普段着だったのではないのでしょうか。

また、画題は「手習子」とあり七夕飾りの名が出てきません。よくみると子供たちはお手本らしきものを見ながら短冊を書いています。七夕に「字が上手になりますように」と願ったようです。七夕は牽牛と織女が合う星祭りと、女性の手芸上達を願う乞巧奠(キッコウデン)という2つの中国の行事が源流とされています。この乞巧奠から「字・習字」の上達を願ったと思われる。明治5年近代学校制度の「学制」が発表されるまでは寺院などの「寺子屋」で手習いをしていた子供たちは、七夕では真剣に「字がうまくなりますように」と願ったことでしょう。

絵の左上には屋根より高い七夕飾りが見えます。当時の七夕飾りは屋上にたてていたことが、明治政府発行の百科事「古事類苑」に書かれており、広重の七夕の絵にも屋根の上に七夕飾りが描かれています。明治6年に江戸時代の五節句(正月七日、桃の節句:三月三日、端午の節句:五月五日、七夕:七月七日、菊の節句:九月九日)の廃止令が出されました。このため、七夕飾りを軒下に目立たないように飾るようになったのでしょうか。しかし、節句の習わしは現在にも脈々と受け継がれています。



- ① 笹竹・蓮の花
- ② 南瓜(かぼちゃ)
- ③ 西瓜(すいか)
- ④ おがら
- ⑤ 切り灯籠
- ⑥ 赤い提灯
- ⑦ ござ
- ⑧ 蓮の葉
- ⑨ 盆提灯

## 盆市

姉崎は五井と並んで周辺の村々の経済の中心地で、お盆には市がたち多くの人々でごった返しました。

お店には掛軸・色紙・盆提灯・西瓜・南瓜・皿・おがらなどのお盆用品が並んでいます。道には笹竹・蓮の花と葉を刈ってきた兄弟、南瓜・スイカ・おがら・お皿を買うお母さんたち、切り提灯売り、ゴザとおがら抱え赤い提灯を喜ぶ赤ん坊を背にしたお母さん、黒染めの男性は蓮を手に提灯を値切っているのでしょうか、大勢の人でごった返しています。

盆市で買った品物で盆棚をつくりご先祖様を迎えました。両脇に茅・おがらなどを紙で巻きつけた笹竹を立て、ササゲ・ほうずき・稲穂・切り紙などをつるし、棚には新しいござを敷き、団子などを供え、棚の下にも蓮の葉を敷き先祖様と同じものを無縁仏に供えました。

ご先祖様が乗るキュウリとナスの馬も飾りました。キュウリ・なすを賽の目に切り、洗米をかけた「水の子」を供えるところもありました。



盆棚(永藤地区)

古老の話では、『昭和37・8年頃までお盆に子供たちが赤い「ほうずき提灯」を持ち、お墓参りに行きました。盆棚には、13日の夜には、来てすぐに唐天竺へ行くご先祖様にオニギリ・お土産のそうめん・おがらの箸を用意する。14日は、里芋汁・菜のごまあえなどを供えて昼に帰ってくるご先祖様にそうめんを用意する。15日に先祖様を送る。盆をしっかりと、昔からの伝えを守って過ごさないと、子供さらいが来たり、子供に熱い湯をかける人が来ると聞かされた。』とのことでした。



## 七月十四日 門題目

画題に題目とあり、団扇太鼓は日蓮宗・法華宗で多く使用されているので、顯本法華宗・妙経寺に関連した行事と思われる。また、軒に切子提灯と盆提灯が吊るしてある事から、新盆の家々を檀家の方々がお題目を唱えて回る習わしがあったのではなかろうか。

甲問客は、団扇太鼓をたたきながらお題目「南無妙法蓮華経」を唱えている。座敷の女性は、お題目を唱えに来て下さったご近所さんであろう皆さんに対し、鄭重な返礼の挨拶をしている。中央左奥では、甲問客が接待を受けている。

左上に満月が見える。満月は地平線上に登り始めだろうから、時刻は夕暮れ時か。

手前のお坊さんと小僧が洋傘を持っている。絵が描かれた明治(1868~1912年)後期には、洋傘が普及していた事が分かる。集まった子供達にスイカなどの御馳走を振舞っている。新盆だからこそ惜しみなく施し、施餓鬼供養にも通じるのであろうか。

家の作りは、上がりがまちは直ぐ畳。雨戸外せば出入り口、障子と襖を取り払えば風が抜ける仕切りのない広い建屋に早変わりする。



- ① 切子提灯と盆提灯
- ② 団扇太鼓にお題目
- ③ 座敷の女性
- ④ 満月
- ⑤ お坊さんと小僧
- ⑥ 子供たち
- ⑦ 家の作り



- ① 団子貰い
- ② 新盆宅
- ③ 山車
- ④ 6人が引く
- ⑤ 山車の提灯
- ⑥ お囃子
- ⑦ ヒョットコ踊り

## 七月十五日夜半団子貰之戯式

旧暦7月15日(送り盆、施餓鬼の最終日)の夜半、団子貰いと三味線弾きが家々を廻り、姉崎の町内を山車が廻っている。

団子貰いと三味線弾きは2組描かれている。団子貰いは手前が女性で、右側の団子貰も後ろ姿から女性のようなのである。服装は小奇麗な和服姿で、受け取った団子を入れる籠を背負っている。団子貰いの後に三味線弾きが続いている。右側の団子貰いの組は、新盆宅に入ろうとしている。暫し演芸に時間をとったであろう。

山車の若者や太鼓若衆・三味線弾きは全員仲間、団子は後程皆で戴いたであろう(椎津の青年団は、昔お寺の社務所で賑やかに喰ったそうだ)。山車は姉崎のジャラボコか。6人の筋骨隆々の若者が引いている。「川新若者」の名が書かれた提灯が確認できる。お囃子は、大太鼓が一つで小太鼓が二つ。太鼓を叩く小若衆は、真剣な真一文字の様相だ。

馬鹿面逆さ踊りの「ヒョットコ」は、後ろ向きの赤禪お尻フリフリ手足逆さまだ。後ろ面が「ヒョットコ」なら表面顔はおそらく「おかめ」だろう。抱腹絶倒、開いた口が締まらない少年は狂喜し、母親におんぶされた乳飲み子がはしゃいで、ずれ落ち寸前だ。

椎津では、千葉県民俗無形文化財に指定されている「椎津のカラダミ」では早朝より乞食と乞食坊主による「団子貰い」が行われ、夕刻より「ソラヤッセ ヨッコラセ ジャラボコジャラボコ オンジャンジャン」の掛け声で山車を引く「ジャラボコ」が現在も行われている。下写真





- ① 角塔婆
- ② 僧侶

七月十六日午後七時頃施餓鬼 姉崎町濱町海岸にて

「施餓鬼」とはお盆に行われる、生前の悪行によって飢え苦しむ餓鬼や無縁仏を供養する行事です。(宗派によっては名称・作法が異なる)

姉崎では浜町海岸(内房線・浜町踏切の先、埋立て前は海岸)に「妙法蓮華經」の角塔婆を立て、妙経寺住職の読経のもと、海難事故の犠牲者の霊に線香を手向け供養がおこなわれていた。

時代が下るが昭和の中頃まで姉崎では「じゃらぼこ」の行事が行われた。これは「施餓鬼」に「万燈会」が追加されたものと考えられる。

『少年の日の幻想曲』(坂本武夫著)を引用する。

『「じゃらぼこ」の行事は盆の終わった夜に催された。

家々から委ねられた盆提灯・きりこ提灯で飾った山車は、闇の中の揺らめきで花電車のようになった。数人の若い衆が浴衣姿で乗り込み、笛と太鼓で趣を添えた。「じゃらぼこ じゃらぼこ おんじゃんじゃん そーらーやっせ おっこらせ」山車は本町通をゆっくり練って、呉服屋の前から浜町海岸へ出た。広場には盆踊りの用意も整えられていた。夜店も出ていた。団扇を使う人たちも待っていた。広場に引き出された山車から提灯が下ろされ、底の皿を剥がして山と積んだ。底はろうそくの灯るまま沖へ向って流した。流す時、お題目が一斉に唱えられた。手拭を目に当てる人もいた。さすがに沖には漁火(いざりび)の影も見当たらなかった。海と空の溶け合う辺りが薄明るかった。イルミネーションに燦らめく夜の東京が忍ばれた。

提灯の底の灯が幾つか遠くへ漂い、星のように小さく瞬いて消えると、提灯の山に火が放たれた。盆踊りが始まった。櫓が一際火に映えた。夜店の張り声が忙しくなった。』



じゃらぼこ(椎津)



- ① 円舞式の踊り
- ② 盆提灯・切り子灯籠
- ③ 子供を負ぶる婦人
- ④ 手拭を被る男女
- ⑤ 覆面・上着の男たち

### 姉崎町盆踊り

村人の衣装から見れる華やかさ、嬉しさ、汗だくで肌けるまで踊り明かす姿から今宵の歓喜が感じられる。お盆時期の恒例一大イベントで、最終日は送り盆の15日。場所は、姉崎浜町の海岸か。盆提灯・切り子灯籠が、飾りと照明となっている。

輪になって踊っているが、歌い手や太鼓が見られない。どのように調子を合わせているのだろうか。盆踊りのルーツは念仏踊りで、踊り手が念仏を唱えながら踊ったという。ここでも踊り手が唄いながら踊っているため、踊りの輪が小さいのであろうか。

みな思い思いの姿で、踊りに酔いしれている。幼児を負ぶったお母さんも大勢見える。数少ない町を挙げての催し、この時とばかり楽しんでいる。

しかし、子供が描かれてないのはどうしてだろう。

江戸時代後期には、盆踊りは男女の出会いの場であったようである。この絵もそれを暗示しているのだろうか。

男女ともに多くが手拭で顔を半隠しにしているように思える。特に、右下の覆面・頬被りの男たちは、盆踊りにふさわしくない出で立ちで、盆踊りのほかに目的があるのではなかろうか。

姉崎・山王山に住む「おさん狐」が椎津・城山の「城山狐」と盆踊りの輪に加わったという昔ばなしも伝わっている。



- ① 獅子頭
- ② 桃売り
- ③ 桃を見せびらかす子
- ④ 桃を食いながら見物

姉崎御祭禮渡輿前全町魁始 児童桃を喰ツテ  
コテーランネー // // ト云テ戸毎二来リ行ク  
(姉崎神社のご祭礼・神輿渡御の前に、子供たちが「桃クツ  
テコテーランネー」と囃子ながら、姉崎町の家々をまわった。)

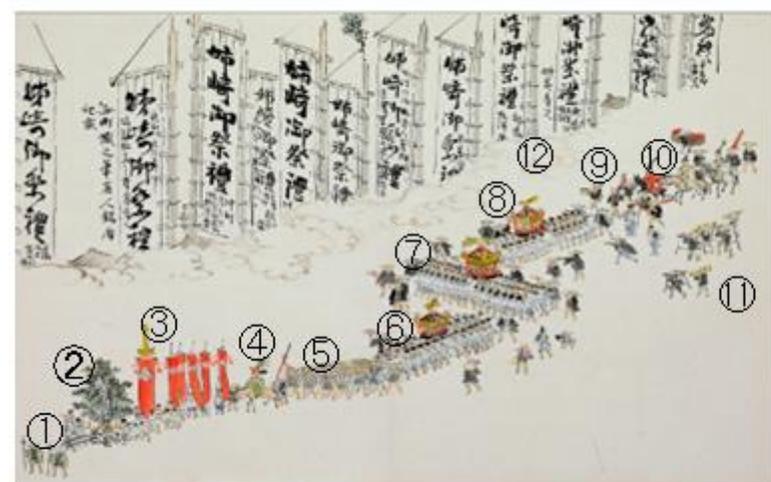
姉崎神社のご祭礼7月20日は桃のシーズンであり、桃は邪  
気を払うといわれる。神輿渡御のまえに獅子が町内を清めると  
の意味があったのだろうか。渡御と同じ3地区、宮本・上町・下  
町をそれぞれに廻った。姉崎神社にはこの時使われた3基の  
獅子頭が残されている。

この子供たちの行事は、椎津・八坂神社では現在も継承され  
ている。毎年7月22日、八坂神社例大祭での神輿渡御に先立  
ち、早朝から子供たちが獅子頭を先頭に椎津地区の各家々を  
「モモクツテ コテランネ おししが舞い込んだ!!」と叫びな  
がら廻る。家々では「ご苦労さま!」と子供たちをねぎらいなが  
ら、お獅子の口に「オヒネリ」を抛りこむ。獅子に子供の頭を噛  
んで貰うと、健やかに育つといわれている。菓子や飲み物を  
用意して子供たちを迎える家も多くある。

下の写真は昭和28年頃の姉崎・上町地区のモモクツテの集  
合写真。団塊の世代の子供たち。



上町・モモクツテ 昭和28年頃



- ① 鉄杖(てつじょう)
- ② 神車(さかきぐるま)
- ③ 御神旗
- ④ 猿田彦(さるたひこ)
- ⑤ お供
- ⑥ 神輿(若宮社)
- ⑦ 神輿(御本社)
- ⑧ 神輿(八王子社)
- ⑨ ご神宝(ごしんぼう)
- ⑩ 神官
- ⑪ 御休み台と真菰
- ⑫ 幟旗(新宿)

## 画題なし

絵巻物のような行列は姉崎神社御祭禮・神輿渡御の場を描いたものです。

行列は先頭から、杖の鉄環の音で邪気を払う先ぶれの鉄杖(てつじょう)、神を立て太鼓を積んだ神車(さかきぐるま)は笛と太鼓で囃子を奏でる現在の山車の原型、神の紋所のご神旗(しんぎ)、ニニギモミコを案内した神話の猿田彦(さるたひこ=天狗)、お供揃い、若宮社・御本社・八王子社の三基の神輿、弓・太刀・履物などのご神宝(ごしんぼう)、馬上の齋主・宮司・神官、最後に齋主の笠が続きます。隊列には神輿を載せる御休み台と台に敷く真菰(まこも)のゴザが付き添います。神輿の担ぎ手は白丁・烏帽子姿、神輿のまわりではお役の人達が扇子であおり景気を付けています。

神輿が三基あるのは今も変わりませんが、この時期の神輿の担ぎ棒には横棒がありません。横棒がないと神輿が左右に揺れ担ぎにくいのですが、当時の街並みの道幅は狭いうえに、道の両サイドには出店・接待の縁台が並び一層狭くなるので、幅をとる横棒はなかったのです。また、宮入の時は表参道の階段を上るため棒は邪魔だったのでしょう。担ぎ手は今以上に大変だったと思われます。



行列の上に姉崎地各部落の幟旗が描かれています。各部落の入口やお休み処に掲げられたものが描かれています。

令和2年、ここに描かれている「新宿の幟旗」が偶然見つかりました。巾1.4m長さ13mと大きなもので道の両側に掲げるため2枚一対で杉箱の中に納められていました。明治十三年に作られた実に140年前のものです。



姉崎神社御祭禮七月廿日翌廿一日蝗送  
世話人ノ宅ヨリ執行ス  
大勢 稲虫おくろ〃〃〃〃と同調し疾走送行ス

全国各地で農作物を害虫から守り、五穀豊穡を祈る行事が行われている。初夏に夜間たいまつを焚いたり、藁人形を作って悪霊にかたどり害虫をくくりつけて、鉦や太鼓を叩きながら行列して村境に行き、川などに流すことが行われる地域がある。

姉崎地区にも子供たちによる「蝗送り(稲虫おくり)」の行事があり、その情景を描いたものと思われるが、この行事を語るひとはいない。

画題・場景から推測すると『姉崎神社のご祭禮の翌日21日の朝、町内の世話役の家から「蝗送り」がはじまる。竹竿に掛けた藁束に幣束を立てた飾り物を中心に、白丁姿の子供たちが「稲虫おくり」と書い竹の幟(のぼり)を手にして「稲虫おくろ、稲虫おくと」大声を張り上げながら町中を走り巡り、飾り物、幟を川や海の流した』のではないであろうか。

姉崎地区には正月十五日に行われた「ほーほんや」という子供行事がある。これは害鳥を追い払い五穀豊穡を願うものであるが、これと同種の子供行事ではないかと思われる



- ① 飾り物(藁束に幣束)
- ② 竹の幟(のぼり)





- ① 十五夜お月様
- ② わらづと
- ③ モグラに驚く女兒

八月十五夜午後八時頃よ利 群童 沢庵を真に  
藁を包圍苞直して毎戸之地をたつき 今宵八名  
月おだ志やれよふ(くり返し)言之

八月十五夜午後八時頃より、子供たちが沢庵を藁で巻いた「わらづと」で家々の周りの地面を叩きながら「今宵は名月出ておいで」との説明があるが、この行事を伝える資料はありません。全国にはこれに似た「モグラ追い」「モグラ打ち」などいわれる子供行事があり、今も行っている地方があるようです。

農作物に害を与えるモグラを追う動作をして、五穀豊穰・家内安全を祈る行事で、藁を巻き付けた竹竿で地面を打つ(九州)、桶を天秤棒でこすり嫌な音を出す(長野)、ナマコに糸をつなげ引きずる(宮城)、槌に縄をつなげ引きずる(新潟)等々様々な形態があるようですが、多くは小正月(旧暦1月15日)に行われていました。そのなかに栃木や茨城では十五夜(同8月15日)十三夜(同9月13日)に「ボウジボウ」(「ワラデッポウ」など別名あり)という行事が今でも行われているとありました。わらを巻いて作った藁鉄炮(芯に「いもがら」や「大根の葉」を入れる所もあり)で地面をたたき、「大麦あたれ、小麦あたれ、三角畑の蕎麦あたれ」などといいつながら家々を廻るようです。

絵の説明では、沢庵を芯に藁を巻いた「わらづと」で地面を打つとなっています。沢庵は手間ひまを掛けた大切な食糧です。なぜ沢庵なのでしょう。いやな音を出してモグラを追う地方がありましたが、姉崎では沢庵の強烈な匂いでモグラをおびき出しこれを打ち据えるためではないでしょうか。こう考えると「今夜は名月出ておいで」のかげ声と一致するのですが、果たして真相はどうなのでしょう。



- ① 天岩戸の人形
- ② 行燈
- ③ ばれん
- ④ 鉦
- ⑤ 笛
- ⑥ 太鼓
- ⑦ 狐面の踊り
- ⑧ 高張提灯

## 風祭

全国で8月1日(八朔)9月1日(二百十日)、9月11日(二百二十日)頃に行う風による稲や農作物の被害を防ぐ祈願をする行事です。その形態は神社でお籠り、獅子舞、わら作りの龍や山車の巡行など様々で、「八尾・風の盆」も風の被害がないことを願うものと言われています。

8月1日は稲の穂が実る頃、9月1日、9月11日それぞれ立春から数えて210日目、220日目、220日目で台風が来る確率が高い日とされ、この頃農作物への被害がないことを願うものです。

姉崎地区では現在でも神社で祈祷、寄合いの「風祭」を行なう地域はありますが、山車の記録は見当たらない。

絵は天照大神が天の岩戸に隠れたとき天手力男命(アメノタジカラノミコト)が岩戸を開けて天照大神を世に戻した神話の人形、「豊年満作」「五風十雨」「万民口口」と書かれた行燈、ばれんを飾る山車の上で、笛・太鼓・鉦のお囃子、狐面の踊りがおこなわれ、半裸の若者たちが山車を引いている。「五風十雨」は五日間風が吹き、十日間雨が降る農作物に良い気候を願ったもの。「仲町 若者中」の高張提灯が見えが姉崎仲町でこのような行事が行われたのだろうか。見物人は団扇も持っているのもまだ残暑が残る頃の時期の情景と推測される。

姉崎では「じゃらほこ」という山車行列が昭和の中頃まで行われていた。川崎稲荷から出発して仲町・本町を通り、坂本呉服店の前で海方面に折れ、浜町海岸へ、「ソラヤッセ オッコラッセ じゃらほこじゃらほこ おんジャンジャン」と囃子ながら山車が巡行したという。この「じゃらほこ」の原型が「風祭」だったのかも知れない。



- ① すすぎ
- ② 団子と枝豆
- ③ 枝豆
- ④ 里芋
- ⑤ 栗
- ⑥ 長火鉢

九月十三夜 はなしにも 実の入る 秋のむつみかな  
 九月(旧暦八月)の十五夜・仲秋の名月は有名だが、十月(同九月)の十三夜のお月見もありました。

絵は一家三世代がそろっての十三夜のお月見風景。机の上にはすすぎ・オミナエシ(黄色)・菊?の花瓶、団子、枝豆が供えられている。島田髷の娘さんとお婆さんは枝豆を食べている。お爺さんとお父さんはサトイモでしょうか、お母さんは栗を包丁でむぎ、子供たちはむいた栗を食べている。後ろには長火鉢に鉄瓶がかかっている、仲の良い一家だんらんの様子が伝わってきます。

十三夜は前月の十五夜に対して「後の月」とも呼ばれ、十五夜を見て十三夜を見ないのを「片見月」といって嫌う風習がありました。十五夜の時期は里芋など芋の収穫時期なので「芋名月」、十三夜の頃は枝豆や栗の時期なので「豆名月」や「栗名月」と呼んでいました。

句の「はなしにも実之入る」は、家族そろっての話に「身が入る」のと大豆のさやに「実が入る(枝豆になる)」とを掛けたものでしょう。「むつみ」は「睦」で、仲良くするとの意味です。

旧暦は月の満ち欠けを基準に作られた暦であり、当時は月にまつわる多くの呼び名、行事が多くありました。

十五夜の前日は待宵月、翌日は十六夜月、その次の火は立待月、20日は寝待月と呼ぶ月見を行い、十三夜・十五夜・十七夜・二十三夜には「月待ち」という寄合が行われました。

「子供のころはお月見の時に、よその家のお月見の団子を竹竿でついて盗んだ。家々では見て見ぬふりをしていた」と長老は思い出を話してくださいました。



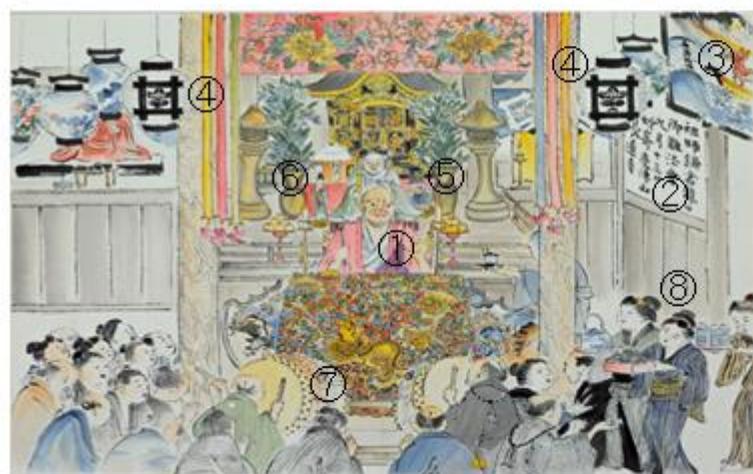
祖師鎌倉龍ノ口御難法会  
九月十三日 姉寄慶傳山長遠寺

「日蓮宗には、宗祖・日蓮が命にかかわる四つの法難(四大法難)の法会がある。四大法難とは、1.伊豆伊東に置き去りされた「伊豆法難」、2.房州小松原で襲撃された「小松原法難」、3.鎌倉龍ノ口で処刑されようとした「龍ノ口法難」、4.佐渡に流された「佐渡法難」です。

この絵は「龍ノ口法難」の法会を描いたものです。文永8年9月12日(1271年)幕府や諸宗を批判したとして捕縛した日蓮を、翌日の9月13日子丑の刻(午前2時前後)日蓮を土牢から引き出し斬首しようとしたが、雷鳴がとどろき、振り下ろした刀が折れ、首を刎ねることができなかったというものです。

説法をしているのは寺の住職であろう。右上上に場景をさりげなく説明した額、日蓮が佐渡へ流されるとき海が荒れたが日蓮が「南無妙法蓮華經」と唱えると静まったとの絵馬、日蓮宗の紋とされる「井桁に橘」を描いた提灯が飾られている。

長遠寺の寺宝である日蓮作と伝えられる開運大黒天と弁財天が飾られ、大太鼓が打ち鳴らされている。「おはぎ」とお茶の接待だろうか、おはぎ、土瓶、茶碗を婦人たちが運んでいる。



- ① 坊様
- ② 法難法会の書
- ③ 佐渡法難の額
- ④ 「井桁に橘」提灯
- ⑤ 開運大黒天
- ⑥ 弁財天
- ⑦ 大太鼓
- ⑧ 接待の婦人たち



- ① 松
- ② 初茸 (はつたけ)
- ③ 鎌を持つ人
- ④ 黄金の田んぼ
- ⑤ 稲穂を荷の馬

### 天羽田山初茸狩

天羽田山での初茸採り。天羽田では多くの種類のきのこがとれたと思うが、画題は「初茸狩り」、なぜ初茸なのか調べてみた。

初茸は松林の中に夏から秋にかけて出る茸で、きのこ類の中で最初に出るので「初茸」の名がついた。遠景に黄金色の田んぼが見え、刈った稲を背にした馬が描かれているのも秋の風景であることがわかる。

初茸は傷がつくと血のような色に変わるなど見た目が悪くなるので、傷をつけないよう取り扱うことが必要とされる。傷めないように、鎌で採っている人もいる。変色しても味は変わらず良い出汁がでるので、炊き込みご飯や汁ものに、またそのままてんぷら、煮つけなどにして広く一般的に食べられていた。芭蕉、一茶なども「初茸」を詠んだ句を残している。

しかし、現在の天羽田には絵にある松林がない。戦時中、飛行機の燃料として「松根油」を作るため松の根を掘り起こしたといわれており、このため天羽田の松林が消えてしまったのだろうか。



初茸



- ① 読経日蓮大菩薩像
- ② 大太鼓
- ③ 「井桁に桶」提灯
- ④ 「め」の絵馬
- ⑤ 賽銭を投げ入れ、  
鱈口を打つ女性たち
- ⑥ 接待の女性
- ⑦ ガス灯？
- ⑧ 物売り

## 十月十二日 會式 長遠寺開帳

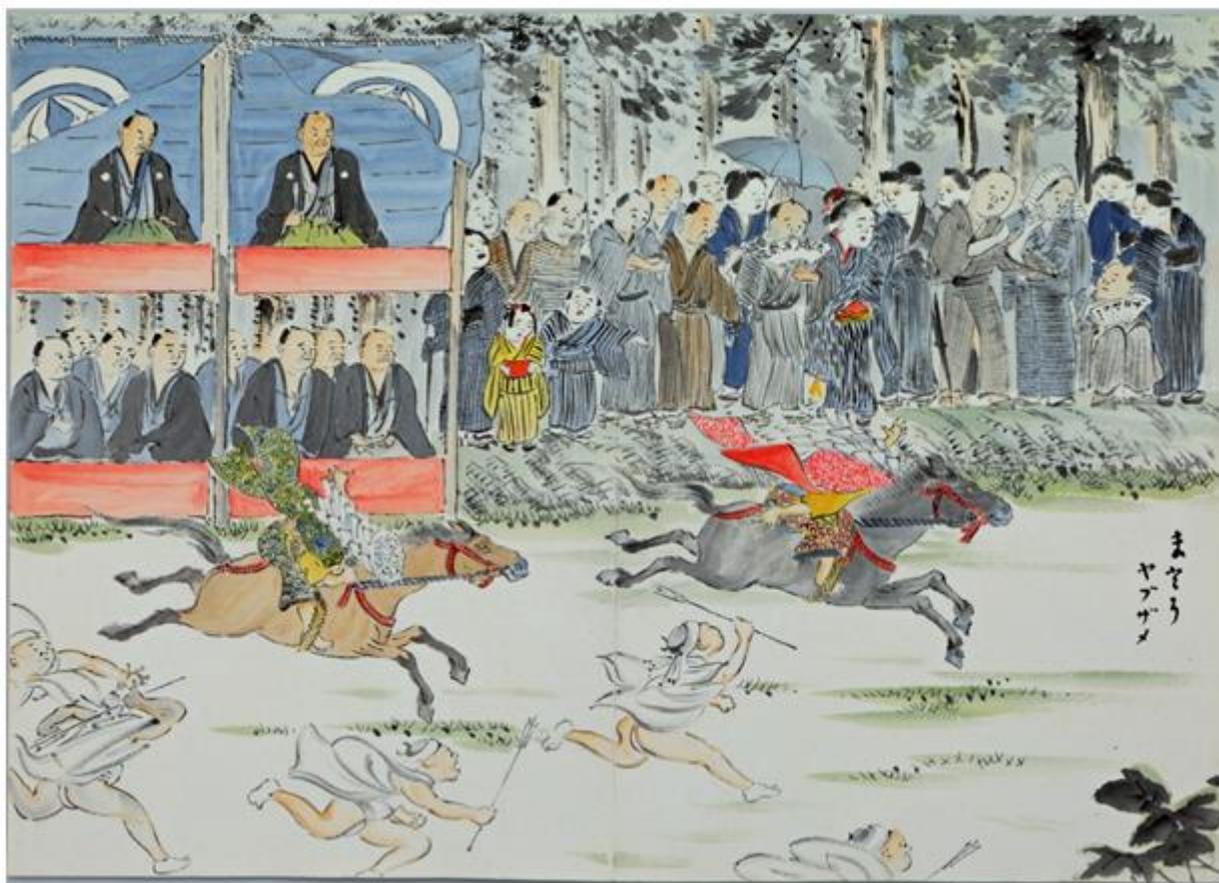
毎月十二日は法会がおこなわれ太鼓の音とお題目を唱える声が四隣に響いたとされ、とくに十月は年一回の御開帳とあって一層多くの参詣者でごった返した。(市原郡誌より)

この絵はその御開帳の场景を描いたもので、中央の厨子の扉が開かれご本尊の「読経日蓮大菩薩像」がお姿を現している。この日蓮像は日蓮の直弟子(日蓮宗では中老という)中老日法上人の作で、深夜に像から読経の声があがるといわれ「読経日蓮大菩薩」と呼ばれている。

僧侶の読経・太鼓が響く中、大勢の参詣者でごった返し、当時の隆盛が偲ばれる。本堂には日蓮宗の紋とされる「井桁に桶」の提灯や「目」の絵馬が掲げられている。ご本尊は病氣平癒とくに目の病にご利益があるとされ、目の病が平癒したお礼に一文銭で作られた「め」の絵馬が奉納されたものだろう。

本堂内では多くの参詣者が座しているなか、接待の女性が串団子や首の長い甕(中はなにか?)を運んでいる。外にも多くの人が詰めかけ、寒さのため男性は頬被り、女性は御高祖頭巾(おこそずぎん)姿が目立つ。賽銭を投げ入れる女性、鱈口を打つ女性もいる。またモチなどを売っているのか、蠟燭の灯の下商いをしている。

人ごみのなか「ガス灯」らしきものが見える。日本初のガス灯は明治5年横浜で点灯、千葉県では明治32年に成田で天然ガスを使ったガス灯が最初とされる。ガス灯はガス製造所からそこまで配管が必要であり、この絵が描かれた明治末期に、はたして姉崎でガス灯が使われていたか不明。ガス灯に似せた油ランプではなかろうか。ちなみに、姉崎に電灯が灯ったのは大正8年頃であり、この絵が描かれた20年くらいあとになる。



- ① 馬に乗っている人  
馬・黒毛、衣装・赤
- ② 馬に乗っている人  
馬・茶毛、衣装・緑
- ③ 馬を追いかけている人  
人数、5人  
白鉢巻、禪、白上着、白足袋
- ④ 羽織袴で見学している役人
- ⑤ 見物客  
和装・扇子に文字・洋傘  
全体的に裕福層か

### まとう ヤブサメ

流鏝馬、馬を走らせながら騎手が弓矢で的を射るもので、もとは中世武士の間に盛行した競技で、後に神事として残り年占の意味を持って行われ種々の民俗を伴うものが多くなっている。

この絵は、姉崎神社で昭和54年まで毎年10月20日に行われていた「まとう」と云われた流鏝馬の行事。姉崎神社の流鏝馬は、源頼朝が姉崎神社で戦の勝利を祈ったことが始まりと伝えられている。

この場所は姉崎神社境内馬場で、現在は駐車場となっている。的は、境内を出てぼらぎ坂を上り切った場所にあった。

馬は、明治時代は近隣の農家から農耕馬を借り、戦後昭和34年から復活した後は、片又木から馬車馬を借りました。昔の馬は頼朝役、式の馬は義経役として、2馬が走った。

式典は姉崎神社の拝殿で行われ、騎士は口取り、矢取りを従えて参加した。騎士等は住民が努め、流鏝馬を行った後は、氏子総代が役人にお酒をふるまった。

その後、地域では農耕馬も馬車も使用されなくなったので、競走馬を借りたりしていたが、ついには馬が調達できなくなり、流鏝馬の行事は行われなくなった。



最後の流鏝馬(昭和54年)



- ①素人力士
- ②出店？
- ③見物客は全員和服
- ④和傘
- ⑤子供

### 流鏝式終更角力

房総は江戸に近く古くから相撲興業や神社仏閣の修理名目での勧進相撲も多く行われた。今でも子ども相撲や信仰に基づく相撲行事も多く残っている。千葉県は相撲の盛んなところということもできます。

姉崎は相撲が大変盛んな土地であった。たくさんの土俵があり、お祭りなど多くの人達が集まるときは相撲大会が行われていた。大会では勝ち抜き戦が行われ、横綱・大関が選ばれた。姉崎神社の「まとう」(流鏝馬)のあとにも相撲大会が行われていた。

坂本武夫著「少年の日の幻想曲」には、昭和12年ころ姉ヶ崎駅近くの原っぱで行われた相撲興行の様子が載っている。

市原市相撲協会の会長は、昭和43年の創立時から令和3年現在まで姉崎の有志が引き継いで努めている。そんな相撲協会や姉崎神社氏子青年部などの応援で、靖国神社で開催された「第7回全国鎮守の森こども相撲大会」で、姉崎神社Bチームが準優勝を果たした記録がある。

しかし、現在は姉崎神社の土俵は廃止され、相撲大会がどこで行われていたかも不明となった。地元姉崎中学校の相撲部も廃止されたが、中学校体育大会相撲競技には選手が出場している。

姉崎出身の力士では、安政元年(1854年)入幕の姉川浪右衛門で前頭8枚目だった。



- ① 拝殿
- ② 手水舎
- ③ 狛犬
- ④ 杖の参拝者
- ⑤ 御神木
- ⑥ 末社殿
- ⑦ 東照宮

### 姉崎神社 無神月参詣の寫意

神無月の参詣。10月は神様が出雲へ集まるので、出雲以外の土地では神のいない月「神無月」と言われる。なぜ、わざわざ神のいない月の参詣風景を描いたのだろうか。神様が出雲へ旅立ちのお見送り、お帰りのお迎えする風習がありそれを描いたのだろうか。

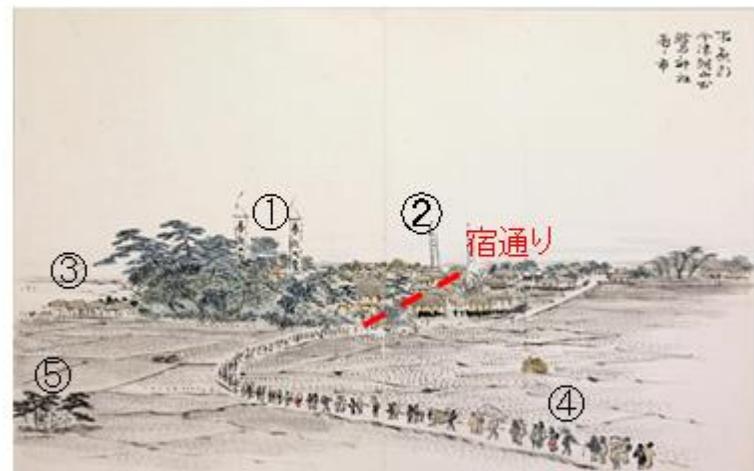
夜だというのに大勢の参詣者。子供を背負ったお母さん、杖にすがり階段を昇るおばあさんまでいる。拝殿では神官が参詣者のお祓いをしている。画題は「神無月」でなく「無神月」としており、姉崎神社では神様のいない月に特別な行事があったのだろうか。この場景を説明する人はいない。

描かれた境内を見ると、現在はある階段口の石工・大嶋久兵衛作の灯籠はないが、狛犬は描かれている。参詣者が清めている手水舎は現在は神門脇に移設されている。

拝殿脇に柵に囲まれた御神木は消失したが、その右に描かれている末社殿、東照宮はいまも健在である。



昭和初期の姉崎神社境内



- ① 鷲神社
- ② 幟旗(のまりはた)
- ③ 海
- ④ 熊手を担ぐ人
- ⑤ 田中地蔵

## 市原郡今津朝山村 鷲神社西ノ市

鷲神社はご祭神・天日鷲命(アメヒワシノミコト)、配祀・日本武尊を祀る。天富命(アメトミノミコト)が肥沃の土地を求め今津朝山に下り、麻の栽培を種を蒔いたとる良質の麻がとれたので、麻で紡績を始めた阿波忌部氏(アワイノベシ)の祖神・天日鷲命を祀ったとされる。

西の市という縁起物の熊手の市というイメージであるが、今津朝山の西の市は熊手だけでなく、生活用品・食料等が売られ、芝居小屋もでて、近郊近在から人々が集まる一大年末市であった。その様子を「今津朝山のあゆみ(野崎馨著)」より紹介する。

『今津は、五大力船で米・野菜・薪炭を江戸へ送り、帰りに食料加工品・衣料などが運ばれる港町であり、また海産物や塩の販売で活気が溢れる物流の中心地であった。』

西の市では、鷲神社の境内に芝居小屋がかかり、境内に続く宿(しゆく:字名)の通りには二百米にわたり両側には農具屋、道具屋、瀬戸物屋、神佛具屋、古着屋、下駄屋、玩具屋、ぼった焼屋、あめ屋、焼いも屋、そば屋、肉屋、果物店、乾物屋、しゃてき屋、植木屋など様々な出店屋がびっしりに続いた。また今津の浜では製塩が盛んであり、今津塩は味噌の製造に適していたと云われて塩や大豆それに糶を売る者もあつた。この江戸時代から続いた「西の市」も明治後半になると、賭博・喧嘩等で統制の乱れ、製塩業の官営移行により衰退し、そして日露戦争が決めてとなり終焉を迎えた。』

絵の幟旗の前が「宿の通り」、神社への道には大勢の人波で西の市の賑わいが見て取れるが、熊手を手に帰る人はまばらで、市での買い物を持った人が多く描かれている。

右下の木立は「いまとり地蔵」として名高い田中地蔵。現在は内房線・延命寺踏切付近に移設されている。



- ① マキカゴ
- ② マキ船
- ③ 腰蓑
- ④ 押送船(おしよくりせん)

押送船:小型船で、船底に「いすす」があり魚介類を生きたまま魚市場に搬送できた五丁櫓(ごちょうろ)の快速艇。

姉崎浦年蛤採 東京買丸船積出押送之写意

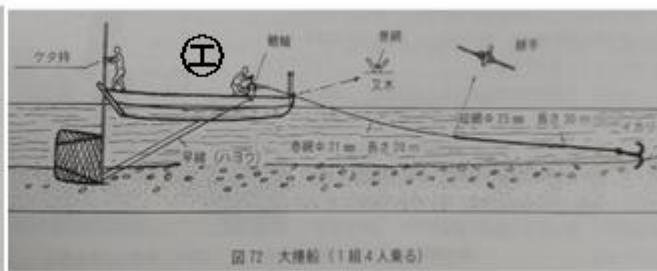
舟の上からマキカゴで海底をかいて貝を採る「大マキ」と呼ばれる漁法で、漁は男性のみである。マキ船は先端からロープで海底に錨を降ろしている。マキ船には2人の漁師が乗り、船上の作業性を考え板が張ってある。マキカゴには櫛刃は無い。漁師は手袋と頬かむり姿で、中央の漁師は腰蓑も装着している。右奥では、船上で火が見える。暖房か炊事をしているのだろう。

左奥には東京から魚介類を買い取りにきた押送船に、蛤などを積み出している。

『市原の失われた漁撈』(市原を知る会 平成18年)には、馬可貝(バカガイ、通称アオヤギ)漁について次のように書かれている。

「ジョレンでの採取漁」1人乗りの船で、竹棹の先に付けたジョレン⑦(鉄製の櫛刃付)で海底を引っ搔いて貝を採取①。

「大捲船による採取漁」大捲船の定員は4人。大捲籠⑧のケタ持ち1人、他の3人が交代で轆轤を巻いて大捲籠で海底を引っ搔いて⑨大量に貝を採取。江戸時代の文献には『大まき 砂底の貝をとること、今はこれを大まきといふ、件の網を車にてまく故大巻の意なるべし』と記されている。





- ① 袋を被る
- ② 姉さん被り
- ③ 障子
- ④ 屏風
- ⑤ 炭
- ⑥ 沓脱石  
(くつぬぎいし)

### 庵のすず掃除 ついでに頼みけり

畳を干して竹竿でバタバタほこりを払う。今は見られなくなった大掃除の風景です。昔は「かまど」などで薪を焚いたため家じゅうにススがたまり、これをはらうことから大掃除と言わず「すず払い」といったようです。

絵は庵の隣に住む夫婦でしょうか、庵の住人に頼まれての大掃除。旦那は袋？を被り振り鉢巻で止め、奥さんは姉さん被りで畳をたたいています。庵には外した障子が立てかけられています。張替をするのでしょうか。

きっと日頃よりお爺さんのお手伝いをしているのでしょう。

当人は日向に家財道具を並べ風よけに屏風を立てたゴザの上にすわり、火鉢でのんびりと手をあぶりながら、掃除が済むのを待っています。家財道具もきっとこの夫婦が運び出したものでしょう。

当時は老人やお互いを支えあう近所付き合いが当たり前であったのでしょう。絵はほのぼのとした感にさせてくれます。

絵の添えられている漢詩は、江戸後期の年間行事を記録した「東都歳時記・商家の煤払い」に書かれている中国の古詩(作者:長自超:清時代の人)。中国でも同じようなすず払いが行われていたようです。「商家の煤払い」には、すず払いは12月13日に行い、掃除が終わった後に主人らを胴上げして、その後蕎麦や鯨汁がふるまわれたと書かれています。

12月13日は正月事始め、年神さまを迎える準備を始める日とされており、この日にすず払いを行う習わしでしたが、正月までに間があるので、すず払いは年末に行われるようになり名前も大掃除となったようです。



## 姉崎町歳末市之光景

この絵図は、年の瀬の正月用品を求める人々で賑わうその場を描いている。姉崎には多くの商店が集まっていたので、歳末になると「年の市」が立った。店にはたくさんの正月に使う品物や、つぎたてのお餅が並べられ、それを買う人、買ったものを運ぶ人々で町中がごった返す大変な賑わいとなった。

屋根は瓦で、壁は板葺きである。店の軒先に吊り下げられたランプの下では、ちょうんまげを結った主人らしき人物が、山高帽をかぶり紋付袴で下駄ばきの客らしい男性や髪にかざり櫛をさしたり頭巾姿のご婦人たちとの商談の様子がうかがわれる。

店内には、樽酒や紅い鼻緒の草履や手桶、橙、ゆずり葉、するめ、ナス、つぎたての餅が並べられている。

店先には、お飾り用のウラジロ、新巻ザケが並ぶ。炭俵の脇では丸二紋の手拭いでほっかぶり姿の3人が餅をつき、これを身を乗り出し見入る子を背負ったご婦人の姿も見られる。

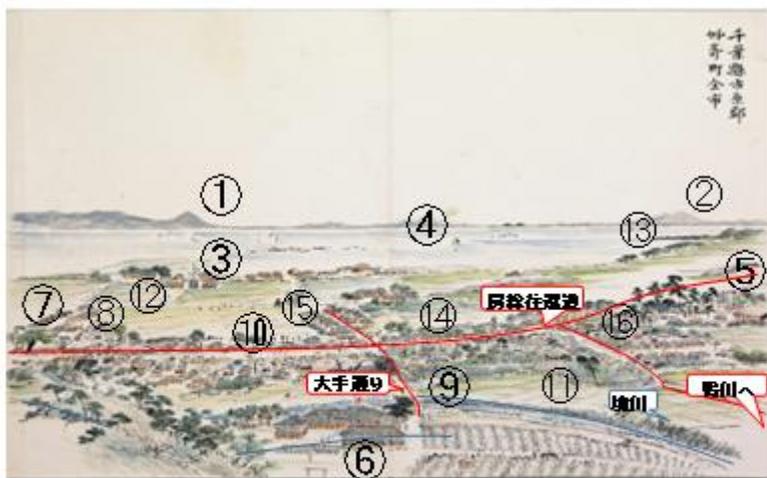
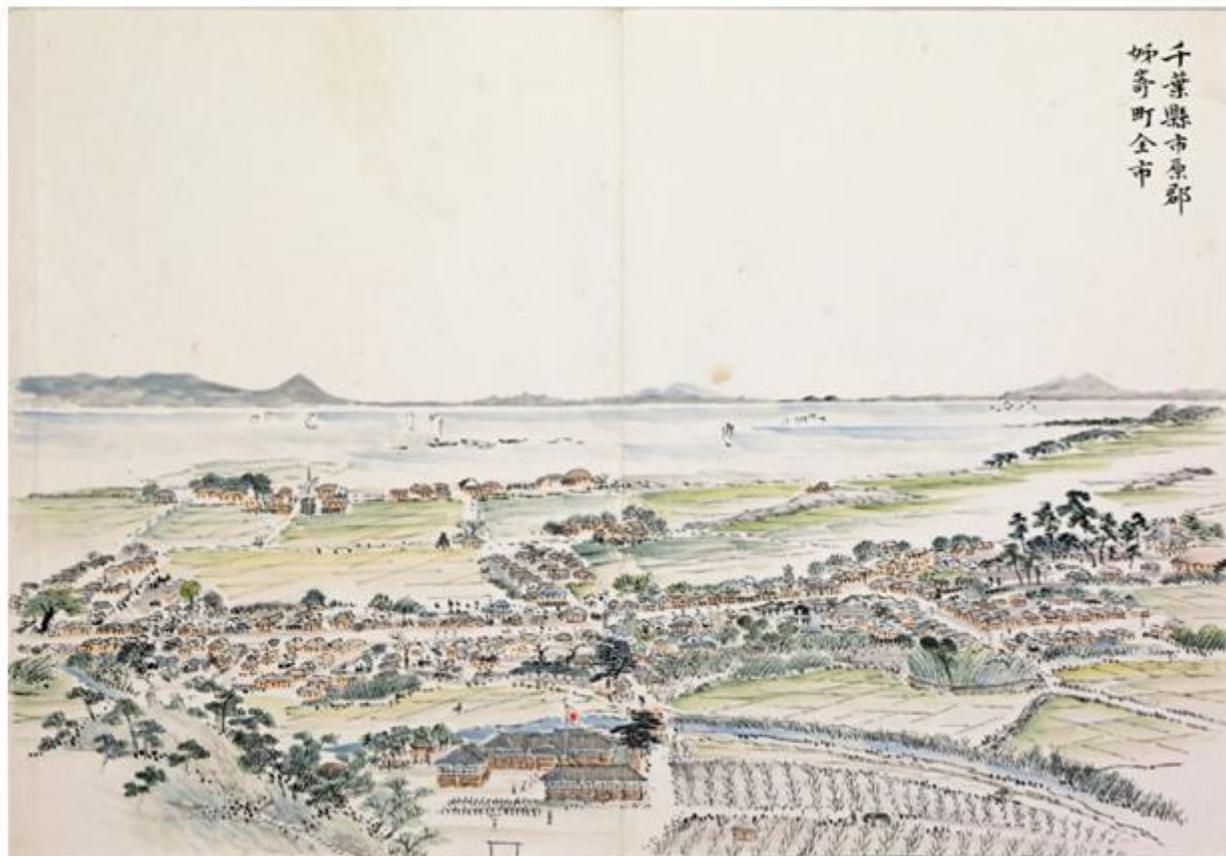
路上では、米俵を積んだ山上印の腹掛けをした荷馬、徳利と新巻ザケを吊るした天秤を担ぎ正月用の飾りシダやしめ縄の入った手桶を持つ人、お飾りを被ぐ人、サケを抱えた人たちが見られる。張替なのか？障子の枠を運んでいるのは経師屋でしょうか。

年の瀬の買い物に、近郊からも多く集まり慌ただしく往来している明治の風俗や場景を屋根上の「猫」が見守っている。



- ① 猫
- ② ランプ
- ③ 酒樽
- ④ 草履
- ⑤ 新巻鮭
- ⑥ 手桶
- ⑦ 障子枠
- ⑧ 橙
- ⑨ ウラジロ
- ⑩ 笹竹
- ⑪ 神

なお、「広報いちほら(昭和61年9月1日号)」によると、姉崎地区では、歳末の12月23日に「本町」、12月28日に「仲町」で市が行われていた。



- ① 富士山
- ② 筑波山
- ③ 三木屋 湊
- ④ 五大力船
- ⑤ 妙経寺
- ⑥ 陣屋跡(姉崎小学校)
- ⑦ 川崎稲荷
- ⑧ 長遠寺
- ⑨ 大手通り
- ⑩ 仲町
- ⑪ 境川(椎津川)
- ⑫ 大河岸
- ⑬ 八反歩
- ⑭ 本町
- ⑮ 浜町
- ⑯ 養老町

## 千葉縣市原郡姉崎町全市

この絵は、姉崎小学校裏の正坊山付近から眺めた姉崎の全景です。

絵の中央部に旧房総往還が通り、東京湾に点在する五大力船が姉崎のかつての繁栄を象徴しているようです。蘆竹の絵には、西に富士山と北に筑波山が良く描かれていますが、この絵でも描かれています。

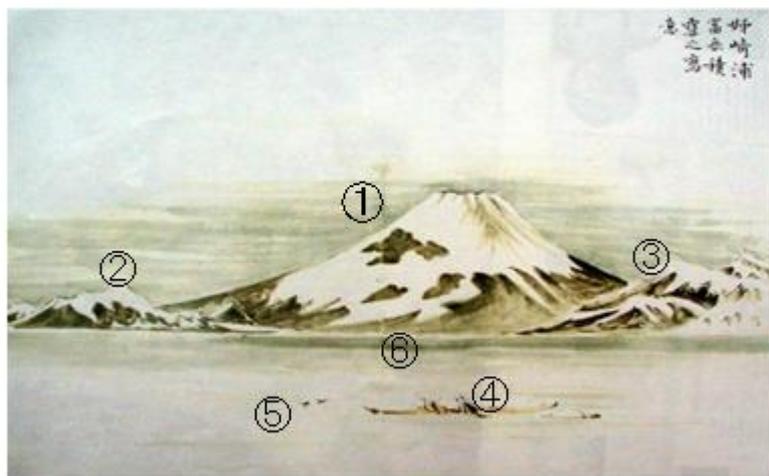
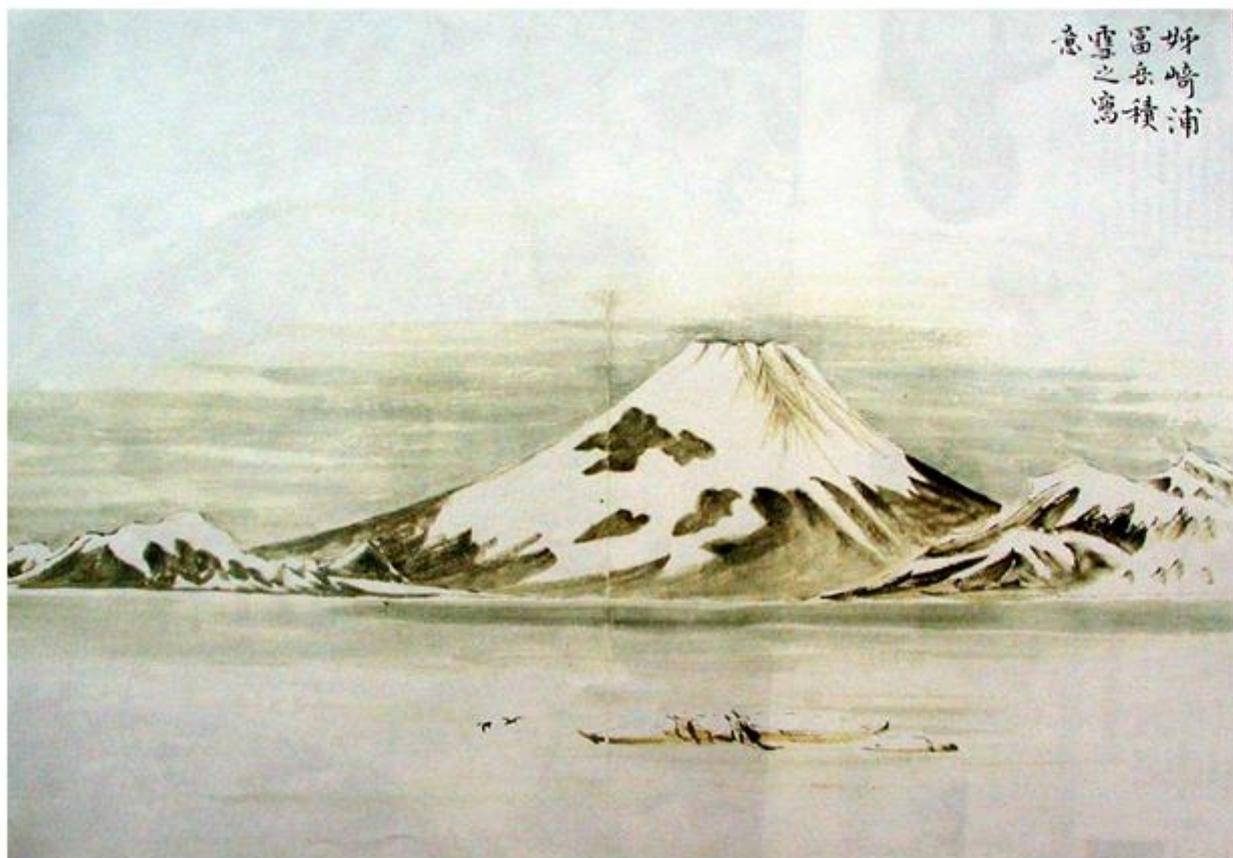
絵の手前に大きく描かれた姉崎小学校は鶴牧藩陣屋の跡で、校門を出ると道は、大手通りに出て大手橋で椎津川(境川)を渡り海岸に向かって伸びています。火の見やぐらが立つ旧房総往還との交差点の先が浜町で、更に先の大河岸(大河岸)には五大力船の帆柱がのぞいています。

交差点の右側・本町と左側・仲町がかつての賑わいの中心部でした。仲町の先の大木は川崎稲荷の御神木でしょう、明治44年に焼失しました。その手前に長遠寺の石碑と、少し入ったところに山門と本堂が見えます。本町と養老町と鴨川への交差する道は屈折し、付近に時を知らせる鐘楼らしき建物が見られます。

絵の右端に目を移すと、白砂青松の浜辺(八反歩)が今津に向ってのびており、右には二子塚古墳が見えます。下には、妙経寺の広い敷地の中に石碑、参道、本堂、講堂等、当時のお寺の繁栄のようすが伺えます。その周りには門前町の養老町です。

旧房総往還には長遠寺の石碑の側、仲町通りに3本ほどの電信柱と電線が描かれています。明治2年8月の横浜での電信網創始以来、北海道から九州まで、そして朝鮮半島まで通信網は設置されました。房総半島では、東京と千葉間が明治11年、千葉と木更津間が明治17年、木更津と館山間が明治22年、佐倉と銚子間が明治18年に電信網は設置されました。

明治45年、養老町北の新宿に姉ヶ崎駅が開業すると、町の中心部は駅前へと移って行きました。



- ① 左稜線
- ② 箱根連山
- ③ 丹沢連山
- ④ 舟上の人物
- ⑤ 舳先に飛交う鳥
- ⑥ 海面の色

### 姉崎浦富岳積雪之寫意

姉崎浦から眺めた頂上に雪を被った富士山の風景です。現在の姉崎海岸は埋め立てられ、工場地帯になりましたが、その昔、絵のように遮るものもなく、富士山が、より大きく見えたことでしょう。

富士山左稜線がなだらかに描かれていますが、宝永山の噴火跡があるため、姉崎方向からは、そのように見えません(描かれた位置は特定できません)。

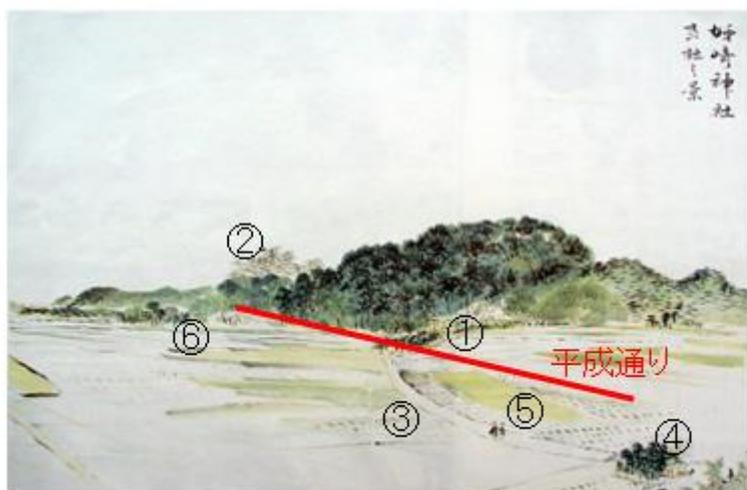
富士山の左に描かれているのは箱根連山で、右に描かれているのは丹沢連山であろうと考えられます。

舟上に描かれているのは舟を操る人物で、舳先に飛来している鳥は、海鷗あるいは鷗であろうと考えられます。

海面の色合いが、近景から遠景へと違いを表現されていますが、潮流や海面温度などにより微妙に変化していく様子が描かれています。

現在、姉崎から眺める富士山は、石油コンビナート工場越しに見え、海岸は遙か街中から遠く離れてしまいました。





- ① 鳥居(現二ノ鳥居)
- ② 天神山古墳
- ③ 湾曲した参道
- ④ 茶屋
- ⑤ 通行人(参拝者?)
- ⑥ 大六天社

### 姉崎神社 森社之景

姉崎神社は、人皇第12代景行天皇40年11月、天皇の皇子日本武尊が御東征の時、走水の海で暴風雨に遭い、お妃の弟橘姫の犠牲によって無事上総の地に着かれ、ここ宮山台においてお妃を偲び、風の神志那斗弁命(シナトベノミコト)を祀ったのが始まりと言われています。祭神は、主祭神支那斗弁命と配祀神4柱の合計5柱が祀られています。

今のように住宅が建て込んでいなかった昔は、広々とした風景の中に姉崎神社の杜(神社のある木立)が聳えていました。よく見ると、麓に鳥居が見えます。現在の二の鳥居です。平成通りは下図赤線を通り、並木の先端に大鳥眺めた風景と思われます。向かって左側に連なる杜は、天神山居が建設されました。

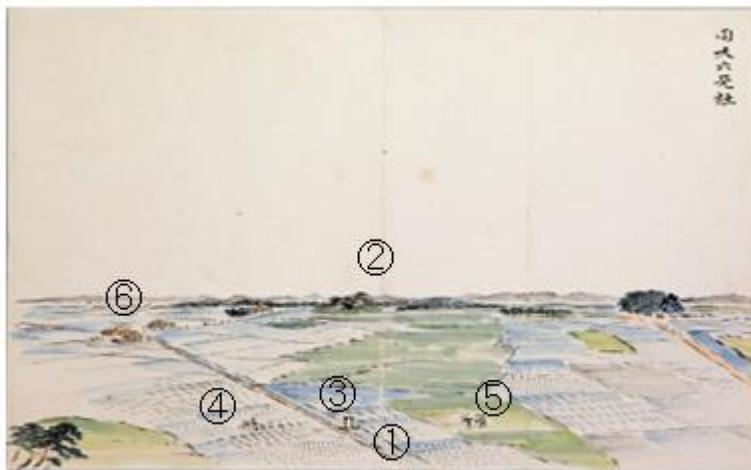
この絵は、今の平成通りの方向から古墳の方向でしょう。その麓に描かれた集落は大六天社と考えられます。鳥居手前の湾曲した道は現飯島マザーズクリニック脇の道で、参道手前の植込み部は茶屋でしょうか。参道の二人連れ人物は男女と思われます。左側(菅笠と蓑)は男性で右側(山高帽とショール)は女性でしょう。

現在(令和3年11月)の姉崎神社。手前が平成通りです。一の鳥居(絵に描かれた鳥居より手前)が平成通に面しています。





同大六天社



同大六天社

- ① ほらぎ坂
- ② 畑木、柏原方向
- ③ 止水堰
- ④ 田植農夫
- ⑤ 早苗準備農夫
- ⑥ 大六天社方向

## 同第六天

ほらぎ坂の下にあった大六天社の遠望です。大六天社は第六天神社ともよばれ、関東地方を中心としてその周辺に存在する神社です。

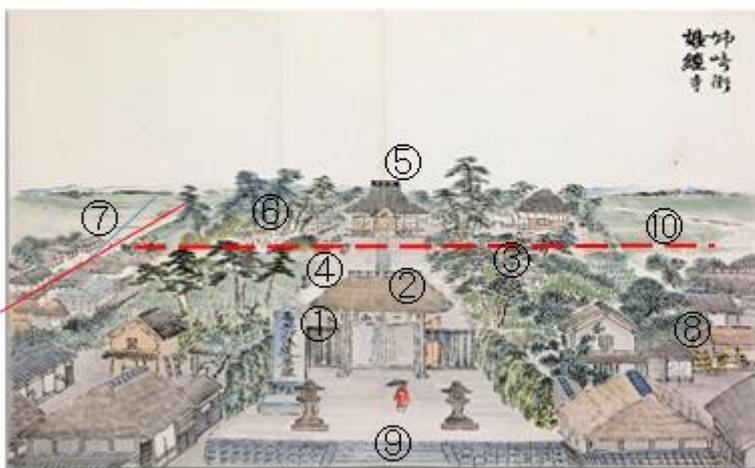
絵の手前側がほらぎ坂の上部からの構図(下図★)と考えられますが、ほらぎ坂の勾配が絵柄上表現されていません。また大六天社の位置が図柄上明確ではありませんが、ほらぎ坂上部からの遠望であれば、畑木・柏原の方向をみたものでしょう。

現在、ほらぎ坂は、姉崎神社例大祭(毎年7月に行われる)の後半のクライマックスで、夕方の宮入時、山車や神輿が、平成通りから神社に向かって、駆け上がる坂道です。

図の水路には止水堰のようなゲート状の構造物が見えます。左側の2人は田植えをしているか、耕しているようです。右側の2人は田植え用早苗の準備でしょうか。

明治初期の地図による大六天の位置





- ① 髭題目石碑  
 ② 山門  
 ③ 鐘楼  
 ④ 石碑？  
 ⑤ 本堂  
 ⑥ 墓地  
 ⑦ 房総往還  
 ⑧ 馬小屋  
 ⑨ 階段  
 ⑩ 現:明神通り

姉崎街  
妙経寺

### 姉崎街 妙経寺

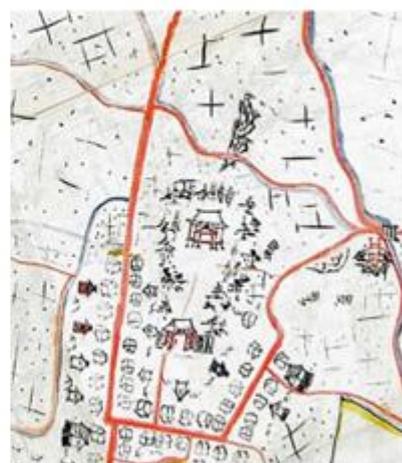
一乗山妙経寺は懸本法華宗で総本山は京都・妙満寺。寛正元年(1460年)日暁上人が開山。徳川家康が10石御朱印を、土気城主・酒井定隆が短刀一振を寄進している。

徳川光圀「甲庚紀行」には鎌倉墓参の途中妙経寺に宿泊したことが書かれており、小林一茶も立ち寄ったとされている。境内には鶴牧藩ゆかりの武人、戊辰戦争戦没義軍、義僕市兵衛、孝子五郎などの墓がある。

手前の階段は今の鴨川街道へのバス通りに面しており、山門は少し奥まって建っていた。山門脇の髭題目石碑は石工・大嶋久兵衛の作であり、現在は絵と反対側に移設されている。広い境内には多くの堂宇や鐘楼が建てられていた。鐘楼の向かいに石碑らしきものが描かれている。現在の山門左わぎに建立されている髭題目であろうか。この石碑あたりに旧姉崎公民館が建てられていたが、現在は上町中央公民館が建っている。萱葺屋根の本堂の左手は墓地となっており、墓地の左手は房総往還であり、行人が描かれている。

右下の家は商家なのだろうか。瓦葺の庇(ひさし)、蔵、馬小屋があり、藁ポッチのよこで馬が草を食んでいる。

姉ヶ崎駅の開業で寺周辺の開発が進み、姉崎駅前整理により平成12年墓地移転整備工事が完成し現在の景観となった。現在の山門前の明神通りは破線あたりを通過している。



明治3年の妙経寺



- ① 本堂
- ② 山門
- ③ 髭題目石碑
- ④ 巡礼者
- ⑤ 人力車
- ⑥ 荷馬
- ⑦ 店
- ⑧ 店
- ⑨ 富士山
- ⑩ 筑波山

## 姉崎町 長遠寺

慶傳山長遠寺は顕本法華宗、本山は京都・妙満寺です。開山は文禄年間(1592~1596)日長上人。ご本尊「読経日蓮大菩薩像」は日蓮じぎじぎの弟子日法上人の作で、像から読経の声が聞こえ、靈驗あらたかといわれこの名がつけられている。

北条氏の家臣・平山蔵人頭が、祖先が日法上人から授かったこの日蓮像を崇敬していたが、豊臣秀吉の小田原攻めで北条氏が滅びたため、蔵波代宿に落ちのび隠遁生活をおくり、その後出家して日長と名乗り、ついには長遠寺を開山したといわれている。(斎藤孝著「古今記録」より)

かやぶき屋根の本堂には鰐口と提灯らしきものが下がる。山門には「慶傳山」の額がかかり、入り口には長遠寺の名が入った髭題目の石碑が建つ。現在も入口に同様な石碑が建つがこれは関東大震災で倒壊した石碑を再刊したもの。かたびら(着物に羽織った袖のない衣)姿に笈(おい:扉のついた箱)を背負い、団扇太鼓をうつ巡礼者が二人。

手前の道は房総往還。側溝があり寺や店の入り口は板が貼られている。その道を急患に向かう医者であろうか山高帽の紳士が二人に人力車を引かせ急ぐ、その前を薪を積んだ馬を引く男性。左右の店は何を商うのか。遠景に富士山と筑波山が描かれている。実際に見えるかは疑問であるが、蘆竹の絵には西に富士山、北に筑波山が頻繁に描かれている。

描かれている堂宇は明治四十四年に椎津村から出火した火事で本堂・庫裡・鐘楼・山門すべてが消失した。

長遠寺は「故郷姉崎町年中行事」を編纂した斎藤家の菩提寺であり、齋藤孝氏ご夫妻の銅像がある。



齋藤孝氏ご夫妻の銅像



- ① 大木
- ② 狢犬(キツネ)
- ③ 手水鉢
- ④ 物売り
- ⑤ 大八車
- ⑥ 電信柱
- ⑦ 幟旗
- ⑧ 側溝
- ⑨ 見物人

## 川崎稲荷

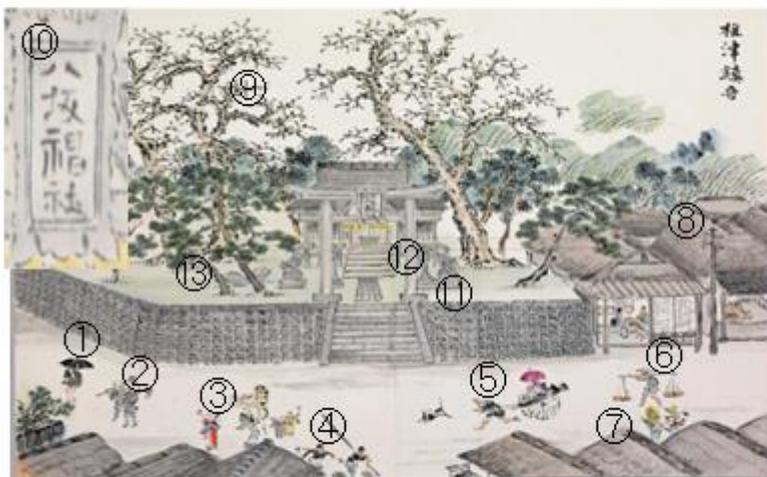
神社庁への登録は「保食神社(ウケモチジンジャ: 食べ物の神様)となっていますが、地元では川崎稲荷神社と呼んで崇めています。川崎稲荷神社は砂子の稲荷神社と並び、椎津城の守り神として祀られました。(「市原のあゆみ」より)

絵にある大木は無くなりましたが、狢犬(川崎稲荷はキツネとなっている)、手水鉢(神様の前や、仏様の前で口をすすぎ、身を清めるための水を入れる器)は今も残っています。左の路地から出てきた物売りは何を売っているのでしょうか。魚の干物販売でしょうか。右下大八車のような運搬車で運ばれているものは薪のようです。右下に電柱電線のような描写がありますが、明治初期には街灯は存在せず、電信用のケーブルでしょう。

ご神木は明治44年椎津の火災で焼失したとのこと。椎津の火災被害規模は不明です。鳥居を潜り抜け左側に水が流れていますが湧水でしょうか。湧水近傍の幟旗が立っており、稲荷神社のものか、近くの店の宣伝かは定かではありません。当時の側溝の構造は石をU字型に並べたものの様です。旅人らしき3人が指差ししているのは、稲荷神社の神事でしょうがこれを知る人はいなくなりました。

下の写真は、現在(令和3年10月)の川崎稲荷。大木は無くなり銀杏の木が鳥居の両側に植えられています。





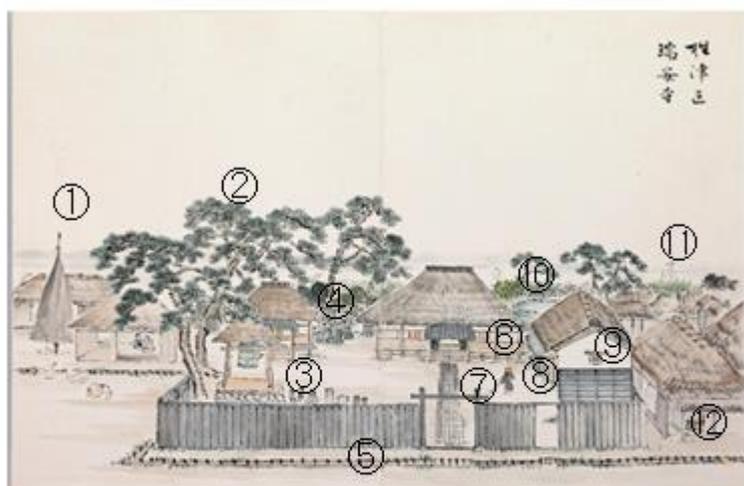
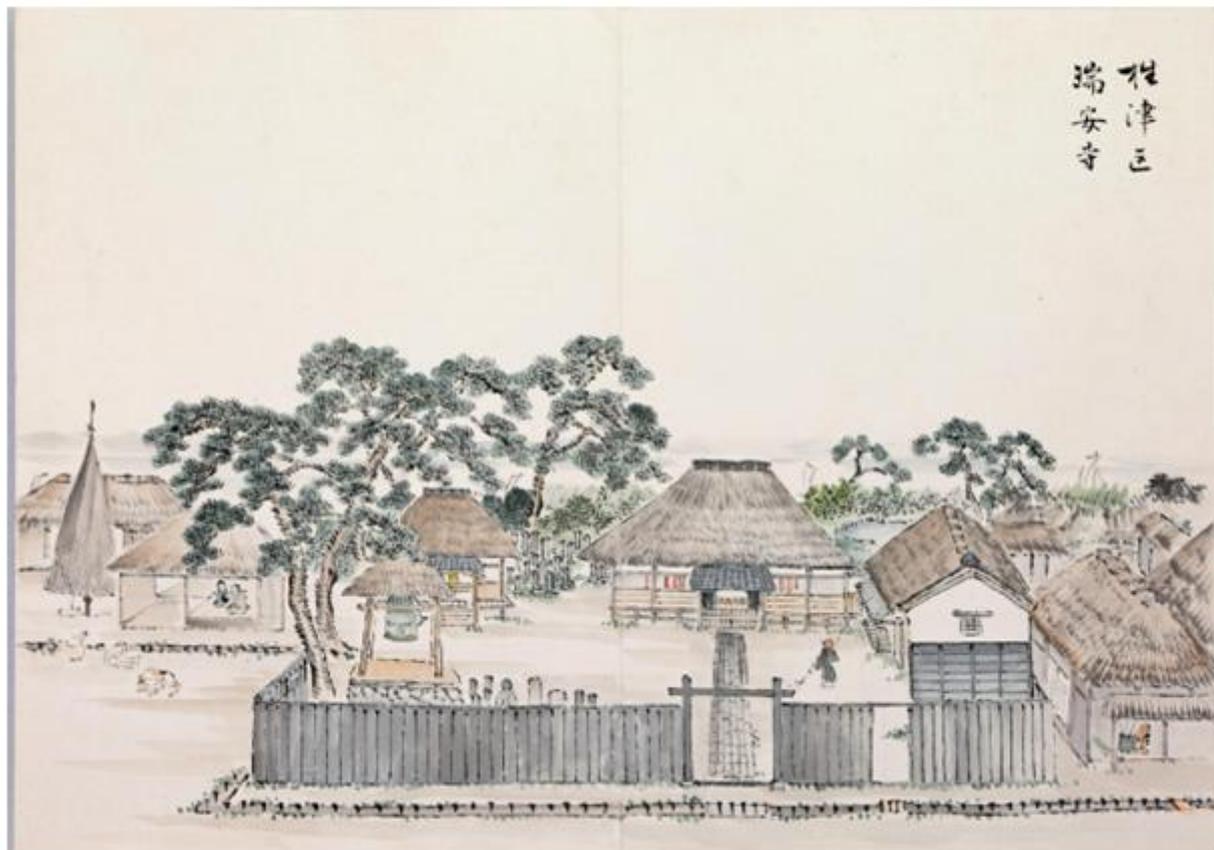
- ① 日傘のお婆さん
- ② 農家の夫婦
- ③ 女性の飴売り
- ④ 漁師
- ⑤ 人力車の女性
- ⑥ ぼてふり商売人
- ⑦ 虚無僧
- ⑧ 電信柱
- ⑨ 御神木の銀杏
- ⑩ 旧鳥居額(異体字)
- ⑪ 狛犬(対)
- ⑫ 灯籠(対)
- ⑬ 2個の力石

### 椎津鎮守

八坂神社の祭神は 建速須佐之男命(タケハヤスサノオノミコト)。昔は「祇園牛頭天王社」と言われ、毎年7月22日に行われるお祭りは「天王祭」と呼ばれていたが、神仏分離令により明治2年「八坂神社」と改号した。

鶴牧藩の守り神とされていたが、後に椎津地区の鎮守様として敬われるようになった。現在の社殿は昭和14年に現在の位置に移転されており、明治・大正期は絵の位置にあった。社殿前の灯籠、狛犬、鳥居は現在もある。昭和の移設迄の鳥居の扁額は「祇園」が掲げられていたが、蘆竹は改号した「八坂神社」の文字を書き入れたものと思われる。神の文字が「異体字」となっている。左狛犬の松木の下に「力石」があり、どこに移設されたかは不明。境内には銀杏の木が3本描かれているが、御神木は左側のものである。

この絵から、明治の椎津の半農半漁の暮し、近代化が伺える。左から、日傘の御婆さん、立話の農家の夫婦、女の飴売りが頭に荷物(日の丸の旗や提灯を立て更に飴をさした盤台)を載せ小太鼓を叩いて客寄せ、旗(飴を買ったら旗をもらえる)を持った子供を背負ったお母さん、飴を求める子供、旗ではしゃぐ子供、楽しそうである。そして、獲物を天秤棒を担ぎ、獲物籠と櫓を担いだ二人の猟師が急いでいる。赤い日傘の女性が乗った人力車、それを犬が吠えながら追っかけている。天秤で海産物を売るぼてふり商人、家の前で虚無僧の男性が尺八を吹き、女性が三味線を弾いている。電柱の下に店が二軒あり、一軒目(現在の消防所)は、木製の軒先、土間に履物、小間物屋で旦那が鉢を囲んで接客し、奥に陳列棚がある。隣の店は、瓦の軒先で、荒物屋でツボ等の商品が並んでいる。電柱には、4本の電線が通り、碇子、木傘の雨よけ、当時電柱は木製で防食がされていた。この絵が描かれた時には、館山迄電信網は完成していた。



- ① 三角錐状の網
- ② 松の木
- ③ 鐘楼
- ④ 文殊菩薩像
- ⑤ どぶ板
- ⑥ 8枚の垂れ
- ⑦ 境内の人物
- ⑧ 軒と縁側
- ⑨ 漆喰塗りの壁
- ⑩ 寺の裏の池
- ⑪ 五大力船の帆
- ⑫ 寺の右わぎの家

### 椎津区 瑞安寺

靈光山桂林院瑞安寺は慶長元年(1596)照譽上人によって開基された浄土宗のお寺です。板塀で囲まれた寺の境内には本堂、蔵、鐘楼、文殊堂、庫裏などの建物が見られます。寺の入口から本堂までは現在と異なり、真っすぐな石畳の道になっています。

左に見える鐘楼は現在はなく、代わりに椎津の浦から引き揚げられたと伝わる文殊菩薩が安置された文殊堂が建てられています。鐘楼の奥の建物の中に黄色で塗られた物が見られますが、おそらくこれが文殊菩薩ではないかと思われます。

本堂の中に8枚の赤い垂のような幡が見られます。

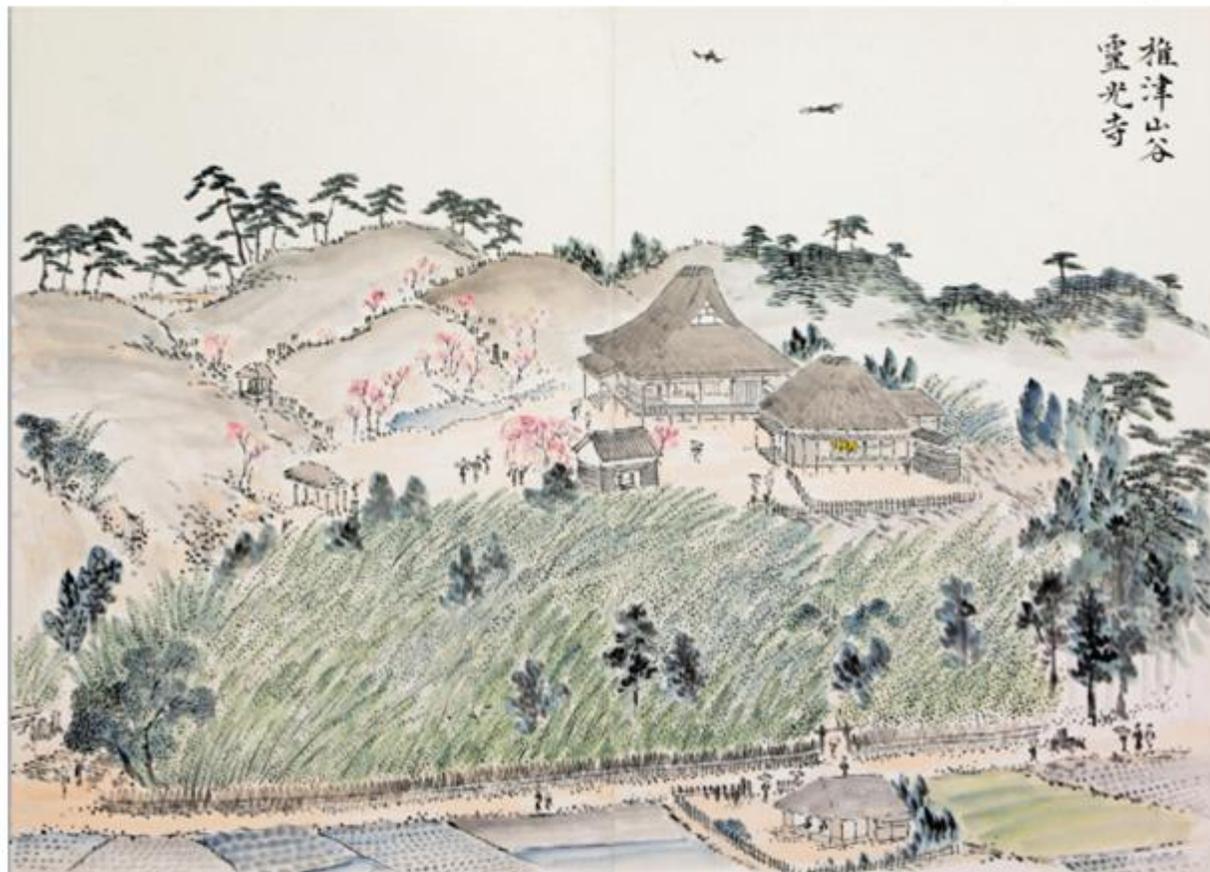
境内で箒を持って掃除をしているのは、この寺の住職ではないかと思われます。当時、この寺の住職は他にもいくつかの寺の住職を兼務していたということです。また、漆喰塗りと思われる蔵があることから、財政的には恵まれていたと思われます。蔵の屋根の下に軒と縁側と思しき造作物が見られますが、これは庫裏ではないでしょうか。

本堂後方には椎津の浦が広がり、松の木の中に3隻の船が見られます。右端の船は五大力船のように見えます。姉崎からは米や薪、藁、松葉などが船に積まれて江戸(東京)へ行き、帰りには江戸(東京)から砂糖、大豆、小豆、鯉節、醤油、酒などが送られてきたようです。

寺裏に池のような水溜りが見られますが、寺の敷地は海まで近かったことや現在でも芦原が見られることから、水が溜まりやすい土地であったと思われます。

画面左手の家の庭に三角錐状の物が見られますが、形状から、かなり大きな刺し網ではないかと推察されます。また、画面右手の家の住人は竹籠を編んでいるように見えます。現在、ここには蘆竹が姉崎に住んでいた頃からの豊屋があります。

下の道脇に見えるのは排水路のようです。これは、蘆竹が描いた姉崎の他の絵の中にも見られます。


 椎津山谷  
 靈光寺

## 椎津山谷 靈光寺

寺の創立は寛治年間(1087~1093)。当時は不動尊が祀られ、不動院と呼ばれていました。元禄5年(1692)頃から如法真言律宗妙高山靈光寺と言われるようになりました。

昭和22年の農地解放まで田畑山林36町歩もの寺領を擁していました。同じ頃、八幡宿の飯香岡八幡宮が所有していた寺領は25町歩だったことを考えると、いかに広大だったかが分かります。

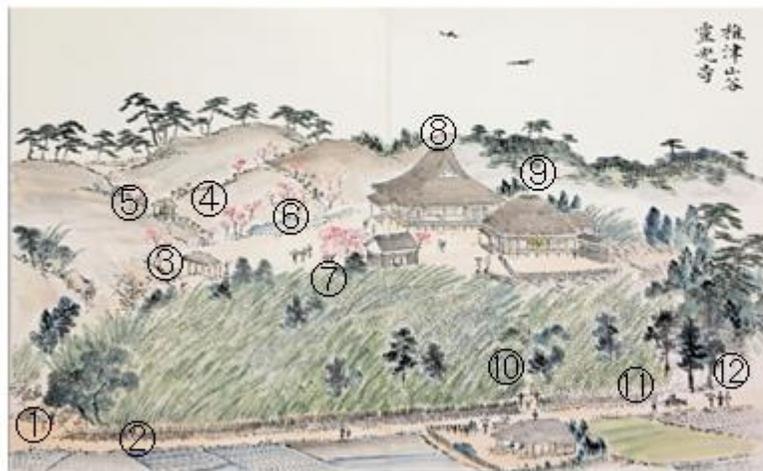
画面左側から坂道を上がると「妙高山靈光寺」と書かれた山門があります。残念ながら、画面中央の桜の木は現在は見られません。

山門の左手から鐘楼に向かって上る道や本堂の左手から橋を渡り、上に上がる道端に描かれている縦の線は明治33年(1903)にこの寺の智竜和尚が四国88箇所巡りに做って置いた石碑だと思われます。一周お参りすることにより四国遍路と同じ功德をいただくことができるようになっていました。

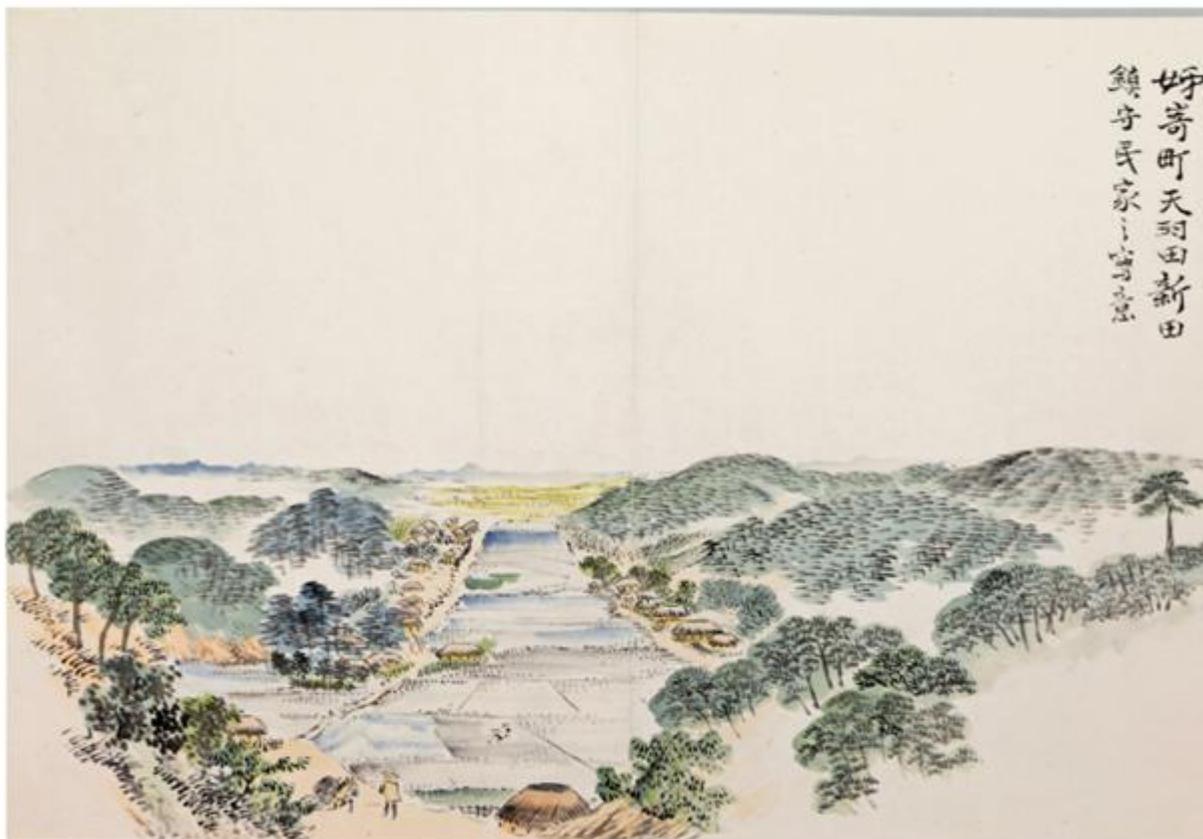
本堂の左手前に池が見られますが、現在はこの位置に池はありません。これまで何度も風水害によって崖崩れが発生したことがあるということですから、それによって池は埋め立てられてしまったと思われます。

本堂は前面五間、奥行き四間の入母屋造り。前面に一間の向拝が付き、四方に高欄付きの縁が廻らされています。軒組は三手先組の詰組で、和様の尾垂木が二段に取り付き、繁垂木が二軒ありました。屋根は大正時代まで茅葺でした。本堂脇の建物は寺を参詣した人たちが休む建物と、住職が生活する庫裏と思われます。建物の中に見える黄色く塗られた物は何でしょうか。

画面下の道は旧久留里街道で編み笠を被った人や牛の背に荷物を載せて運ぶ人、振袖姿の女性や洋装の女性が見られます。


 椎津山谷  
 靈光寺

- ① 山門への入口
- ② 旧久留里街道
- ③ 山門
- ④ 四国88箇所巡り
- ⑤ 鐘楼
- ⑥ 池
- ⑦ 桜
- ⑧ 本堂
- ⑨ 本堂脇の建物
- ⑩ 庫裏に通じる道
- ⑪ 牛を追う人
- ⑫ 洋装の女性



- ① 天照大神
- ② わらぼっち
- ③ 耕す人
- ④ 荷を運ぶ

### 姉崎羽田町天新田鎮守の寫意

明治期の天羽田は姉崎の飛び地であったことから「姉崎町天羽田新田」の題名となっています。

この絵は南の山側から海側に向かって天羽田村を眺望したものの（下図矢印あたりか）。絵の題名が「写意」となっているので、かつて行った天羽田を記憶で描いたもので、細部は正確性に欠ける点を留意する必要があります。

村の鎮守は天照大神（テンショウダイジン）、大日靈命（オホヒルメノミコ＝天照大神）をご祭神とし、姉崎神社を勧請したとの話が伝わっています。その隣に妙遠山安誠寺（ミョウオンサンアンジョウ）・顯本法華宗のお寺があります。

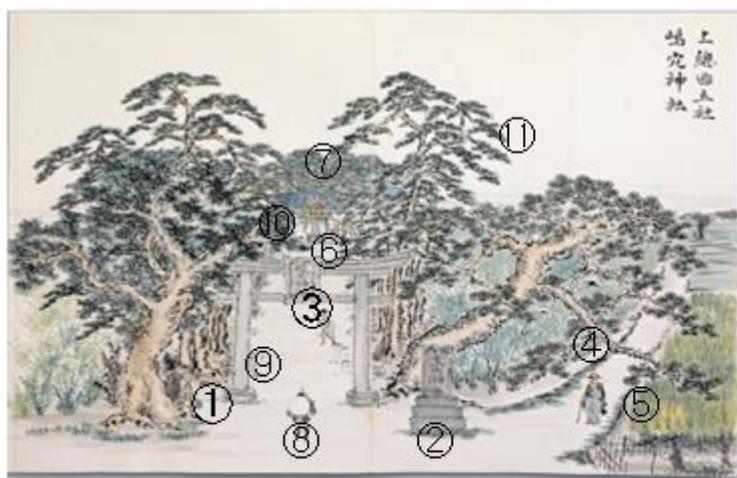
民家は南北に走る谷津田をはさんで左右に展開し、二本の道が谷津田を横切っている。この道が現在も残っており奥の道が姉崎から久留里へ向かう「久留里西往還」であり、手前の道が文化庁選定歴史の道に指定された「鎌倉街道・上総道」です。

館山道の完成で谷津田は分断されたましたが、家並みはそのままです。初冬の風景でしょうか遠景に脱穀した藁を保存する「わらぼっち」がみえます。天羽田の家並みは菊の葉状の台地の谷底にあるため三方を急な坂に囲まれており、荷を背負った馬の後ろ足が見えないのは急坂を登っていることを描いていると思われます。





上総国五社  
嶋穴神社



上総国五社  
嶋穴神社

- ① 道祖神とわらじ
- ② 石碑
- ③ 一ノ鳥居
- ④ ハットのお爺さん
- ⑤ 柵と果樹棚
- ⑥ 神橋
- ⑦ 拝殿
- ⑧ 旅人
- ⑨ 神官
- ⑩ 二ノ鳥居
- ⑪ 松の木

### 上総国五社 嶋穴神社

嶋穴神社の主祭神は風の神の志那都比古尊(シナツヒコノミコト)および倭比売尊(ヤマトヒメノミコト)であり、日本武尊(ヤマトタケルノミコト)を配祀する。志那都比古尊は姉崎神社の支那斗弁命(シナトベノミコト)の夫もしくは弟とされる。紀記神話によれば、景行天皇40年、日本武尊の東征の際に走水の海で暴風雨に遭い、妃の弟橘姫の犠牲によって上総に上陸できた。社伝では、そのとき弟橘姫が大和国の龍田大社の神に、無事に上総まで航行させてくれるのなら風鎮めの神を祀ると祈ったので、日本武尊は弟橘姫命の遺志に従い、この地に志那都比古尊を祀ったと伝える。日本武尊の歿後、父の景行天皇は日本武尊東征の縁の地を歴訪し、当社に日本武尊命・倭比売尊を合祀した。延喜式神名帳に記載された式内社であり、明治4年に菊間藩の郷社となり、明治12年に県社に昇格した。本殿は明治25年に屋根を銅板に取り換えており、まさしく蘆竹の絵も銅板である。平成になり本殿改修、幣殿・玉垣・拝殿を改築し、現在の姿になった。

一ノ鳥居右脇の「式内嶋穴神社」の石碑は、現存する勅願所石碑(弘化4年建立)の碑文の表記を変えたものであり、鳥居左側の道祖神(文化8年建立)はこの石碑の裏側に移されている。現在の一ノ鳥居は平成3年に再建されたもの。二ノ鳥居は明治41年に改築されており、描かれているものは改築前のものであろう。二ノ鳥居のまえの太鼓橋のようなものが、前川にかかる神橋で、現在は神橋と二ノ鳥居の間に宮の橋(みかげ石製)が造営されている。大正4年にかけられたものであるからこの絵には描かれていない。

神社全体が松に覆われているが、コンビナートが建設された昭和40年頃松は枯れ、県の補助でクス・シイなどの広葉常緑樹が補われ現在の社を形作っている。一ノ鳥居の先で神官らしき人が掃除をし、鳥居の手前では、旅人が旅の安全を祈り両手を合わせ、左の道祖神の前には草履が備えられている。右の道は、古代道の鳥穴駅に通じている道と思われる。この道を山高帽にステッキのお爺さんが歩いているが、鳥居の前の旅人とは時代的に違和感がある。

手前右の方に果樹棚は、八幡梨が250年前から栽培され、江戸時代に棚が考案されたといわれるが、それであろうか。



絵はあばら家で次郎兵衛の女房にお茶を差し出す市兵衛と、母に寄り添う万五郎を描いている。戊申は明治41年(1908年)。

起きてきけ 此のほととぎす 市兵衛記  
戊申夏日 晋兵衛 蘆竹謹製

元禄・5代将軍綱吉「生類憐みの令」のさなか、姉崎深城で田畑を荒らす害獣と誤って「竹」とい女性を撃ち殺すという事故が起きた(お竹騒動)。関連名主7名は重刑を恐れ内々で処置してお上には届けないこととしたが、これを幕府が知ることになり、関連名主は全て家屋・領地没収のうえ大島へ遠島となった。

姉崎村の名主・次郎兵衛の下僕・市兵衛は、日頃の恩を返すのはこの時と、次郎兵衛の父親、女房、長男万五郎を養うことにした。ただでさえ貧しい生活、娘を奉公に出し、寝る間を惜しみ働きづめで世間では気が狂ふれた夫婦と噂をしたほどだった。さらに市兵衛は江戸まで通い、自分を身代わりとして主人の赦免を哀願し続けた。哀願すること10年、門前払いをしていた幕府も市兵衛の主人を思う忠義に打たれ、ついには赦免のを決め、次郎兵衛らは故郷に戻るようになった。

一介の下僕が江戸幕府の裁きを撤回させたことは江戸中の評判となり講談・歌舞伎にも取り上げられた。また荻生徂徠なども賛辞を表し、松尾芭蕉の弟子の俳人・宝井其角は「起きて聞け このほととぎす 市兵衛記」との市兵衛を讃える句を残した。

明治以降の修身の教材となり、大正時代には「あけ行く空」との題名で映画化され、昭和16年村上元三は市兵衛の活躍を描いた「上総風土記」で直木賞を受賞した。

姉崎神社の境内には市兵衛を支援した江戸小網町木挽町・穀物問屋 姉崎屋四郎右衛門親子が奉納した手水舎が現存している。

市兵衛の墓は姉崎・妙経寺の境内にある。





雷雨の中、雷が嫌いだった母親の墓を守るために墓所に向かう五郎。  
(明治四十一年・日本橋本銀町(ほんしろがねちょう) 亀集堂)

鳴る神や 耳にもふれず 孝能道 七十二歳 華山  
文化年中姉崎町孝子五郎之寫意  
明治四十一年戊申六月 龜集堂  
東京日本橋区本銀町寓

五郎は大変な母親想いであった。家は大変貧しく、自分  
は農僕となり他家に出稼ぎをするなどして、母親を養っていた。  
母親は芝居好きだったが足が悪く出かかれなれないため、近  
所に芝居があれば必ず見に行き、帰ってその仕草を真似て見  
せて母を喜ばせた。また、母親は雷が大嫌であったため、雷  
が鳴り始めると何処にいても走って帰り、母親の傍に付き添う  
った。母の死後も雷鳴を聞くと墓に駆けつけ、その墓を抱い  
て母を慰めていたという親孝行者でした。やがて、その事が  
鶴牧藩主水野忠順の耳に入り、その孝を称賛され生涯扶持  
が与えられた。

五郎は弘化四年(1848年)四月二十日没。墓は妙経寺にあ  
り、地元の篤志家林善誠が五郎を讃えた歌碑が並立する。

「ごろごろと鳴る雷に五郎きて親の墓所を守る孝行」

また、地元の俳人・斎藤華山は

「鳴る神や 耳にもふれず 孝の道」の句を残した。

孝子五郎は修身の教本になり、大正時代に頌徳碑が妙経  
寺境内に建立された。





南総上埴生郡 笠森観音堂 坂東卅一番



望陀郡久保田村 笠上観音春色



養老川 出津桜花



鹿野山子安峠 眺望



安房国鏡ヶ浦 富山 伊与ヶ嶽望 保田鋸山 一望之写意



南総太東岬 小浜八幡之景



下総国印旛沼 筑波山眺望

## おわりに

「むかしの姉崎のくらし」発刊にあたり、知り合いの長老や郷土史研究の先生方を訪ねて色々教えていただきました。また、インターネットや図書館で関連する書籍や資料を探したり、関連施設に問い合わせたりもしました。また、コロナ過による様々な制限から情報の信頼性向上に妥協することを余儀なくされました。集めた資料から自分の考えを文章化して、規定の文字数にする作業がとても大変でした。読んでくださる皆様にわかり易く伝えるために構成や言い回しに気を付けました。このような作業を通じて、あたらしい発見や知識とスキルを身につけることができたと思います。

この冊子を発刊するにあたり、多くの方々の協力や支援をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

この冊子を通して、少しでも地域の文化やくらしに興味をもって頂ければ幸いです。これまでの地域の歴史を次の世代に伝えていく、つないでいく橋渡しになればと思っています。あわせて、この冊子が、昔の故郷の文化やくらしに思いを馳せるきっかけとなるような楽しい読み物となることを願っています。

上野 重則

◇特任担当者  
撮 影:樋口敏雄  
文体統一:清水収  
発刊纏め:上野重則

◇編纂に携わった者(五十音順)  
石岡一史 石黒修一 伊豆丸明子 上野重則 梅野敏行  
小川鉄次 奥島三男 柿岡敏弘 金谷司仁 清水収  
寺田栄一 外山文子 中島章三 中島宗光 樋口敏雄  
丸山芙美子

## おわりに

「むかしの姉崎の暮らし」発刊にあたり、知り合いの長老や郷土史研究の先生方を訪ねて色々教えていただきました。また、インターネットや図書館で関連する書籍や資料を探したり、関連施設に問い合わせたりもしました。また、コロナ過による様々な制限から情報の信頼性向上に妥協することを余儀なくされました。集めた資料から自分の考えを文章化して、規定の文字数にする作業がとても大変でした。読んでくださる皆様にわかり易く伝えるために構成や言い回しに気を付けました。この様な作業を通じて、あたらしい発見や知識とスキルを身につけることができたと思います。

この冊子を発刊するにあたり、多くの方々の協力や支援をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

この冊子を通して、少しでも地域の文化や暮らしに興味をもって頂ければ幸いです。これまでの地域の歴史を次の世代に伝えていく、つないでいく橋渡しになればと思っています。あわせて、この冊子が、昔の故郷の文化や暮らしに思いを馳せるきっかけとなるような楽しい読み物となることを願っています。

上野 重則

◇特任担当者  
撮 影:樋口敏雄  
文体統一:清水収  
発刊纏め:上野重則

◇編纂に携わった者(五十音順)  
石岡一史 石黒修一 伊豆丸明子 上野重則 梅野敏行  
小川鉄次 奥島三男 柿岡敏弘 金谷司仁 清水収  
寺田栄一 外山文子 中島章三 中島宗光 樋口敏雄  
丸山芙美子

むかしの姉崎の暮らし  
発行日 令和6年3月31日  
発行者 姉崎を知る会

